仙台市文化財調査報告書第218集

四郎丸館跡

―― 第２次発掘調査報告書 ――

１９９７年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第218集

四郎丸館跡

――第2次発掘調査報告書――

1997年3月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なご協力を頂き、まことに感謝に絶えません。

本市の南東部に位置する四郎丸地区は豊かな田園地帯であり、おもに近郊農業地帯として推移して参りました。しかしながら、近年では市街化が急速に進み、仙台市のベットタウンとして生まれ変わりつつあります。

今回の四郎丸館跡の調査も、こうした市街化の流れの中で平成６年の調査に続く第２次調査として実施されました。調査では、前回の調査と同様に中世の館跡に関わる堀跡や建物跡が多数確認された他、方形周溝墓も発見されました。このうち特に方形周溝墓については、昭和58年に北側に隣接する戸ノ内遺跡で１基、平成６年の調査で３基が発見されており、この付近に古墳時代の墓域が予想以上に広がっていることが判明するなど、多大な成果をあげることができました。

本書はこのような調査成果を収録したものであり、多くの方々に積極的に活用され、学術研究の場で役立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際して、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成９年３月

仙台市教育委員会

教育長　堀　籠　克　彦

例　　言

1．本書は宅地造成に関わる四郎丸館跡の発掘調査報告書である。

2．出土遺物の整理と報告書作成は平間亮輔、伊藤孝行が担当し、編集は平間が行った。陶器・磁器の鑑定に際しては佐藤　洋の協力を得た。なお、本文の執筆分担は以下の通りである。

平間 ― 第1章
　　第2章　第3節4
　　〃　第5節
　　〃　第6節
　　第3章
伊藤 ― 第2章　第1節
　　〃　第2節
　　〃　第3節1・2・3
　　〃　第4節

3．発掘調査および報告書作成にあたっては次の方々から多くの指導・助言・協力を受けた。
高橋一夫、坂野和信、福田　聖、西川修一、鈴木　功、福仙興業株式会社（敬称略）

4．本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は仙台市教育委員会で一括保管している。

凡　　例

1．本書中の土色については「新版標準土色帖」小山、竹原1995を使用した。

2．本書使用の地形図は国土地理院発行5万分の1「仙台」（平成7年編集）、同「岩沼」（平成2年編集）、仙台市都市計画課作成の2.5万分の1「都市計画図」である。

3．本書中の北は磁北を示している。

4．遺構の略称は次のとおりで、それぞれに通しNoを付けた。

SA：塀跡・柵跡などの柱列	SB：掘立柱建物跡	SD：溝跡
SE：井戸跡	SK：土坑	P　：柱穴などのピット

5．掘立柱建物跡の柱痕跡はスクリーントーンで示した。

6．掘立柱建物跡・柱列跡模式図中の数字は柱間隔（cm）を示す。

7．土師器の黒色処理、陶器外面の釉の範囲はスクリーントーンで示した。赤彩は橙色で示した。

8．遺物の法量のうち（　）は図上復元値である。

9．鉄製品・石製品等の長さのうち（　）は現存値を示す。

10．引用・参考文献は巻末にまとめた。

目　　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査にいたる経緯……1
　第２節　調査要項……1
　第３節　遺跡の概要……3
　第４節　調査方法……4
　第５節　基本層序……7

第２章　検出された遺構と遺物……8
　第１節　Ⅱｂ層の遺構と遺物……8
　　１．遺構の概要……8
　　２．溝跡……8
　第２節　Ⅲ層の遺構と遺物……9
　　１．遺構の概要……9
　　２．溝跡……9
　　３．土坑……14
　第３節　Ⅳ層の遺構と遺物……16
　　１．遺構の概要……16
　　２．溝跡……16
　　３．井戸跡……18
　　４．掘立柱建物跡・一本柱列跡・ピット……21
　第４節　Ⅴａ層の遺構と遺物……40
　　１．遺構の概要……40
　　２．溝跡……40
　第５節　Ⅴｂ層の遺構と遺物……42
　　１．遺構の概要……42
　　２．１号方形周溝墓……42
　第６節　その他の出土遺物……48

第３章　考察……50
　第１節　遺物について……50
　第２節　遺構について……55
　第３節　まとめ……61

引用・参考文献……62
報告書抄録……80

挿図目次

第１図　周辺の遺跡……2
第２図　調査区位置図……3
第３図　調査区設定図……5・6
第４図　遺構全体図……5・6
第５図　基本層序……7
第６図　ＳＤ３・４平面・断面図……8
第７図　Ⅲ層上面全体図……9
第８図　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２出土遺物……10
第９図　ＳＤ１Ａ・１Ｂ平面・断面図……11・12
第10図　ＳＤ５平面・断面図……13
第11図　ＳＤ５出土遺物……13
第12図　ＳＤ７・８平面・断面図……14
第13図　ＳＫ１平面・断面図……15
第14図　Ⅳ層上面全体図……16
第15図　ＳＤ６Ａ・６Ｂ平面・断面図……17
第16図　ＳＤ６Ａ・６Ｂ出土遺物……18
第17図　ＳＤ９・11平面・断面図……19
第18図　ＳＥ１・２出土遺物……19
第19図　ＳＤ10・ＳＥ１・２
　　平面・断面図……20
第20図　Ⅳ層上面ピット群平面図……21
第21図　ＳＢ１・ＳＡ１模式図……21
第22図　ＳＢ１・ＳＡ１平面・断面図……22
第23図　ＳＢ２平面・断面図……23
第24図　ＳＢ２模式図……23
第25図　ＳＢ３模式図……24
第26図　ＳＢ３平面・断面図……24
第27図　ＳＢ４模式図……25
第28図　ＳＢ４平面・断面図……25
第29図　ＳＢ５平面・断面図……26
第30図　ＳＢ５・６、ＳＡ２平面・断面図……27・28
第31図　ＳＢ５・６、ＳＡ２模式図……27・28
第32図　ＳＢ６平面・断面図……29
第33図　ＳＢ７平面・断面図……30
第34図　ＳＢ７模式図……30
第35図　ＳＢ８模式図……31
第36図　ＳＢ８平面・断面図……31
第37図　ＳＢ９模式図……32
第38図　ＳＢ９平面・断面図……32
第39図　ＳＢ10平面・断面図……33
第40図　ＳＢ10、ＳＡ３・４平面図……34
第41図　ＳＢ10、ＳＡ３・４模式図……34
第42図　ＳＢ11、ＳＡ５模式図……35
第43図　ＳＢ11、ＳＡ５平面・断面図……36
第44図　ＳＢ12平面・断面図……37
第45図　ＳＢ12、ＳＡ６模式図……38
第46図　ＳＢ12、ＳＡ６平面図……38
第47図　ＳＢ13模式図……39
第48図　ＳＢ13平面・断面図……39
第49図　掘立柱建物跡・一本柱列跡出土遺物……40
第50図　ＳＤ２平面・断面図……41
第51図　ＳＤ12・13平面・断面図……41
第52図　１号方形周溝墓平面・断面図……43・44
第53図　１号方形周溝墓出土遺物（１）……45
第54図　１号方形周溝墓出土遺物（２）……47
第55図　その他の出土遺物……49
第56図　１・２次調査遺構全体図……57・58
第57図　中世遺構の新旧関係模式図……59
第58図　中世遺構変遷図（１）……60
第59図　中世遺構変遷図（２）……61

挿表目次

表1　周辺の遺跡地名表……2
表2　ＳＡ１柱穴一覧表……22
表3　ＳＢ１柱穴一覧表……23
表4　ＳＢ２柱穴一覧表……23
表5　ＳＢ３柱穴一覧表……24
表6　ＳＢ４柱穴一覧表……25
表7　ＳＢ５柱穴一覧表……26
表8　ＳＡ２柱穴一覧表……27・28
表9　ＳＢ６柱穴一覧表……29
表10　ＳＢ７柱穴一覧表……30
表11　ＳＢ８柱穴一覧表……31
表12　ＳＢ９柱穴一覧表……32
表13　ＳＢ10柱穴一覧表……33
表14　ＳＡ３・４柱穴一覧表……35
表15　ＳＢ11・ＳＡ５柱穴一覧表……35
表16　ＳＢ12・ＳＡ６柱穴一覧表……38
表17　ＳＢ13柱穴一覧表……40
表18　破片集計表……51

写真図版目次

〔遺構〕

写真1　１号方形周溝墓完掘状況……65
写真2　中世の堀跡（ＳＤ６）完掘状況……65
写真3　ＳＤ３確認状況……66
写真4　ＳＤ３完掘状況……66
写真5　ＳＤ４確認状況……66
写真6　ＳＤ４完掘状況……66
写真7　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２確認状況……66
写真8　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２完掘状況……66
写真9　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２完掘状況……66
写真10　ＳＤ１Ａ完掘状況……66
写真11　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２断面……67
写真12　ＳＤ５完掘状況……67
写真13　ＳＤ５断面……67
写真14　ＳＤ７完掘状況……68
写真15　ＳＤ７断面……68
写真16　ＳＤ８完掘状況……68
写真17　ＳＤ８断面……68
写真18　ＳＫ１完掘状況……68
写真19　ＳＫ１断面……68
写真20　ＳＤ６Ａ・６Ｂ確認状況……68
写真21　ＳＤ６Ａ・６Ｂ完掘状況……68
写真22　ＳＤ６Ａ・６Ｂ完掘状況……69
写真23　ＳＤ６Ａ・６Ｂ断面……69
写真24　ＳＥ１完掘状況……70
写真25　ＳＥ１断面……70
写真26　ＳＥ２完掘状況……70
写真27　ＳＥ２断面……70
写真28　Ⅳ層上面柱穴群全景……70
写真29　ＳＤ９完掘状況……71
写真30　ＳＤ９断面……71
写真31　ＳＤ２断面……71
写真32　ＳＤ12断面……71
写真33　１号方形周溝墓完掘状況……71
写真34　１号方形周溝墓確認状況……72
写真35　１号方形周溝墓完掘状況……72

〔遺物〕

写真36　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２出土遺物……73
写真37　ＳＤ５・６出土遺物……74
写真38　ＳＥ１・２出土遺物……74
写真39　掘立柱建物跡・
　　－本柱列跡出土遺物……75
写真40　方形周溝墓出土遺物（１）……75
写真41　方形周溝墓出土遺物（２）……76
写真42　方形周溝墓出土遺物（３）……77
写真43　第１次調査１号方形周溝墓出土の壺……77
写真44　その他の出土遺物（１）……78
写真45　その他の出土遺物（２）……79

第1章　はじめに

第1節　調査にいたる経緯

当遺跡の所在する四郎丸地区は近年急速に市街化が進みつつある。昭和58年に行われた戸ノ内遺跡の発掘調査以来、遺跡の周辺においては継続して宅地開発が行われてきたが、遺跡内においても平成5年に開発行為の協議が開始され、遺跡東半部は平成6年に行われた第1次発掘調査の後、すでに宅地として開発されている。

今回の調査対象地区は、前回宅地として開発された地区の延長部分として開発協議が行われた。対象地区は遺跡範囲外であったが、第1次調査区の東側隣接地であることから、試掘調査を行い、その結果をもとに再度協議を行うこととした。試掘調査は平成7年5月29日～6月2日にかけて行われ、溝跡等の遺構が確認されたため、本調査を実施することとなった。

第2節　調査要項

遺　跡　名：四郎丸館跡（仙台市文化財登録番号C－536、宮城県遺跡登録番号01240）
調　査　名：四郎丸館跡第2次発掘調査
所　在　地：仙台市太白区四郎丸字戸ノ内87-1、91-1
調査主体：仙台市教育委員会
調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査第二係
　　担当職員　平間亮輔　伊藤孝行
調査期間：1996（平成8）年4月10日～5月30日
調査対象面積：608㎡
調査面積：534㎡
調査協力：福仙興業株式会社

発掘調査参加者

青木　吉次	浅見　禮子	阿部みのる	入間川きみ
伊藤　清子	遠藤いな子	大沼みさほ	小畑　和子
加嶋みえ子	工藤きく子	佐藤とき子	佐野たみえ
庄子　弘子	鈴木　いし	須賀　栄子	菅井　清子
菅井きみ子	高橋たづよ	菅谷　裕子	竹森　光子
田中さと子	椋沢　純子	早坂みつえ	福山　幸子
本郷　正	山田千代子	三浦つよの	渡辺　洋子

整理作業参加者

相沢美佐子	熊谷きぬ子	斎藤喜恵子	佐藤よし子
雫石　良子	高橋　弘子	横山美代子	渡辺まき子

第1図　周辺の遺跡

番号	遺跡名	種　別	立　地	年　代
1	四郎大館跡	館跡・集落跡・墓跡	自然堤防	古墳前・平安・中世・近世
2	戸ノ内遺跡	集落跡・周溝墓	自然堤防	弥生・古墳前・平安・中世
3	中田堀中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
4	堀和北遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
5	旅河原遺跡	木田跡	自然堤防	奈良～近世
6	中田前遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～中世
7	安久東遺跡	集落跡・周溝墓	自然堤防	弥生～近世
8	柴遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
9	前田館跡	城館	自然堤防	中世
10	松木遺跡	屋敷跡	自然堤防	近世
11	骨天田古墳	古墳	自然堤防	古墳
12	城丸古墳	古墳	自然堤防	古墳
13	仙台大塚山古墳	古墳	河川敷	古墳
14	今熊野遺跡	貝塚・集落跡・周溝墓	丘陵	縄文早・前、弥生～平安
15	五郎市遺跡	集落跡・周溝墓	丘陵	縄文～古墳前
16	西野田遺跡	集落跡・周溝墓	丘陵	旧石器・縄文前・後・古墳・古代
17	宮下遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古代
18	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
19	野田山遺跡	集落跡	丘陵斜面	弥生・古墳～平安
20	鶴谷遺跡	包含地	自然堤防	古墳
21	鶴巻遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
22	金剛寺貝塚	貝塚	丘陵	縄文前・後・晩
23	十三塚遺跡	貝塚・集落跡	丘陵	縄文・弥生・古墳前・中
24	雷神山古墳	古墳	丘陵	古墳
25	飯野坂古墳群	古墳	丘陵	古墳前
26	高館古墳	古墳	丘陵	古墳前
27	宇賀崎古墳	古墳	丘陵	古墳中・後
28	高館城跡	城館	丘陵	中世
29	飯野愛大館跡	城館	丘陵	中世
30	前沖中遺跡	包含地	沖積平野	古墳・奈良・平安
31	前沖北遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
32	下余田遺跡	集落跡	自然堤防	古墳中・古代
33	神明遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
34	熊野那智神社	神社跡	丘陵中腹	中世・近世

表1　周辺の遺跡地名表

第3節　遺跡の概要

1．遺跡の概要

四郎丸館跡は、藤原秀衡の家臣である名取四郎の居館、同氏が源頼朝に滅ぼされた後は曽我氏の居館、さらに室町末期には伊達家家臣菅井和泉守実国の居館として伝えられてきた。このため当初から中世の城館として意識されてきた遺跡であり、北側に隣接する戸ノ内遺跡の昭和58年の調査および平成6年の当遺跡第1次調査では「四郎丸館跡」に関連すると考えられる遺構が検出されている。また第1次調査では近世の屋敷跡に関する遺構も検出されている。

しかし、前述した戸ノ内遺跡の調査において古墳時代前期の方形周溝墓や竪穴住居跡が発見され、また当遺跡第1次調査でも3基の方形周溝墓が確認されるなど、館跡としてだけではなく古墳時代前期の墓域や集落としての性格も持つようになってきている。

2．地理的環境

四郎丸館跡はＪＲ東北本線南仙台駅の東方約3㎞、名取川の南岸に位置する。名取川の河口からは約4㎞で、標高は3～3.5ｍである。遺跡は名取川の自然堤防が後背湿地に張り出したちょうど先端部に位置している。東側と南側には水田として利用されている低湿地が迫っていて、水田との比高差は約1ｍである。

第2図　調査区位置図

3．歴史的環境

名取川下流の平野部および西側の高館丘陵には各時代を通して多数の遺跡が確認されている。ここでは川の南岸部において、今回の調査に関連する古墳時代以降の遺跡を中心に概観してみたい。

古墳時代前期の集落跡は、当遺跡の南西5～6kmにある今熊野遺跡、西野田遺跡、野田山遺跡などが丘陵上に分布している他、当遺跡に隣接する戸ノ内遺跡、北西1kmの中田畑中遺跡、北東約1kmの昭和北遺跡、西方約3kmの安久東遺跡、南方約3kmに位置する鶴巻前遺跡など低地においても確認されている。さらにこれらの集落遺跡のうち今熊野、西野田、戸ノ内、安久東の各遺跡と、西野田遺跡の南方1.5kmに位置する五郎市遺跡では方形周溝墓が発見されており、方形周溝墓と集落が密接な関係を持ちながら平野の各地に散在している様子がみてとれる。またこのころの高塚古墳としては、雷神山古墳、飯野坂古墳群、高館山古墳、宇賀崎古墳などがあるが、これらは西側の丘陵上に位置している。

この他、古墳時代の集落としては西方2.5～4kmに中田南遺跡、清水遺跡、栗遺跡などがあり、このうち清水遺跡、栗遺跡では後期の遺構が数多く検出されている。

奈良・平安時代には清水遺跡、中田南遺跡などで集落の拡大が認められる他、中田畑中遺跡、安久遺跡、安久東遺跡、鶴巻前遺跡などで集落跡が検出されているなど遺跡数は増大する。

中世になると平野西側の高館丘陵の上には高館城跡、熊野堂大館跡、川上大館跡など大規模な山城が築かれ、平地には松木遺跡、安久東遺跡、前田館跡、中田南遺跡、四郎丸館跡など、城館や居館・屋敷が数多く造られるようになる。また、高館丘陵の麓に位置する大門山遺跡付近は中世を通じて大規模な信仰の場であったことが明らかにされている。

近世の名取川沿いの地域は農村地帯である。当遺跡は四郎丸村に含まれ、四郎丸村は「封内風土記」によれば約60戸の屋敷があったとされる。当遺跡の1次調査では文政年間に作られた「名取郡北方四郎丸邑」絵図に描かれた屋敷に関連すると考えられる建物跡や溝跡が発見されている。なお、山田条里遺跡でも有力農民の屋敷跡が発見されている他、松木遺跡でも有力者と関連すると考えられる屋敷跡が調査されている。

第4節　調査方法

1．調査区の設定

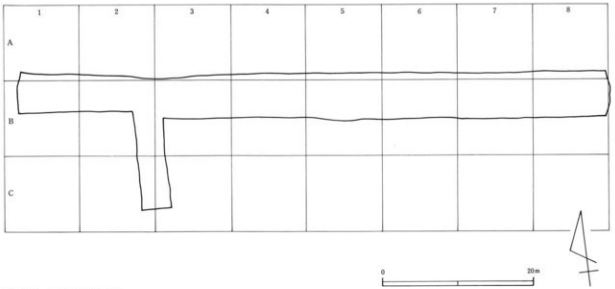
建設予定の東西道路の方向にあわせて東西の基準線を設け、これに直交する南北の基準線と共に10mグリッドを設定した。南北基準線の方位は磁北から5°東に振れている。グリッドの名称は南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字とし、その組合せで表した。また、グリッド交点の名称は交点の南東側のグリッドの名称で示した。

2．調査方法

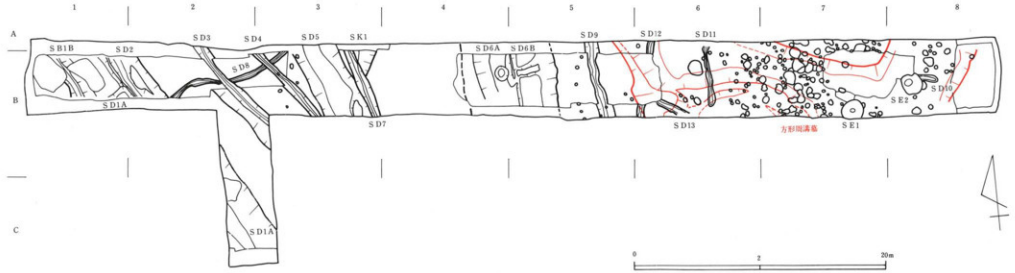
調査予定地はすでに盛土整地がされていたため、重機で盛土および直下のⅠ・Ⅱ層を除去した。精査はⅢ層上面から行ったが、重機で掘削する際にⅢ層をやや掘りすぎたため、Ⅲ層上面で精査できた範囲は狭い。なおⅣ層以下の精査も各層ごとに順次行うよう努めたが、Ⅳ・Ⅴ層の遺存状況が悪く、分布が限られることもあって本来の掘り込み面が確認できない遺構もあった。なお、最終的にはⅥ層上面まで掘り下げて精査を行ったが、Ⅵ層以下については、深く掘り込まれた遺構の断面観察では文化層らしい層が確認できず、また第1次調査でも遺構・遺物が検出されていないことからこれ以下は無遺物層と判断し、掘り下げは行わなかった。

遺構の平面図は、基準杭を利用して簡易遣り方を組み、1/40で作成した。断面図は1/20で作成した。写真は35mmモノクロとリバーサルで撮影している。

遺物は各遺構ごとに取り上げたが、遺構に伴わない基本層中の遺物は、層ごとにグリッド別に取上げた。



第3図　調査区設定図



第4図　遺構全体図

第5節　基本層序

今回の調査では盛土下に8層を確認した。第1次調査区の基本層序ともほぼ一致する。大別するとⅠ層がややグライした粘土質シルト、Ⅱ層が明るい色調のシルト、Ⅲ～Ⅴ層が黒色系のシルト、Ⅵ層が明るい色調の砂質シルトである。層の傾きは、東西方向については東に向かって傾斜していることが判るが、調査区の南北方向の長さが短いため南北方向については不明である。

Ⅰ　層　2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト。厚さは5～20cmで平均10cm程度である。下面は比較的凹凸がある。調査区の全域に分布する。盛土以前の水田耕作土である。

Ⅱa層　10YR4/2 灰黄褐色シルト。厚さは5～24cmで平均15cm程度である。下面は凹凸が少ない。調査区西部のA・B－2・3グリッド付近に分布し、近世以降の畑の耕作土と推定される。

Ⅱb層　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。厚さは5～40cmで平均20cm程度である。下面は凹凸があり、下層を攪拌している。調査区全域に分布し、近世以降の畑の耕作土と推定される。上面から近世の遺構が掘り込まれている。

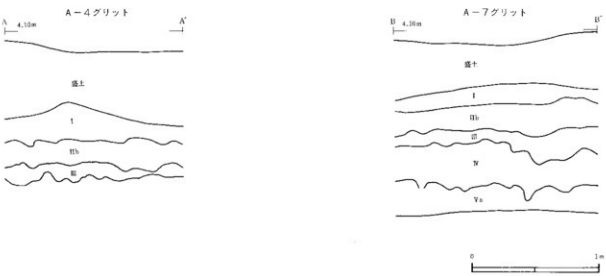
Ⅲ　層　10YR3/1 黒褐色シルト。10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロックと木炭粒を微量に含む。厚さは5～25cmで平均10cm程度である。下面は比較的凹凸が少ない。調査区のほぼ全域に分布する。上面から中～近世の遺構が掘り込まれている。

Ⅳ　層　10YR3/2 黒褐色シルト。厚さは4～38cmで平均25cm程度である。調査区の東半部に分布する。上面から中世の遺構が掘り込まれている。

Va層　10YR3/1 黒褐色シルト。厚さは5～25cmで平均20cm程度である。調査区の東半部、A・B－6グリッドから東側に分布する。

Vb層　10YR3/1 黒褐色シルト。10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロックを微量に含む。厚さは15～30cmで平均20cm程度である。調査区の東半部、A・B－5グリッドから東側に分布する。上面から古墳時代前期の方形周溝墓が掘り込まれている。

Ⅵ　層　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。厚さは約30cmで、調査区全面に分布する。



第5図　基本層序

第2章　検出された遺構と遺物

第1節　Ⅱb層の遺構と遺物

1．遺構の概要

Ⅱb層は、調査区全域にわたり分布していたが、Ⅲ層上面まで重機で除去したため、Ⅱb層上面の精査はできなかった。遺構はⅢ層中の平面で確認したが、断面観察によりⅡb層上面から掘り込まれたことが判明した溝跡が2条あった。遺構の時期は、近世と考えられる。

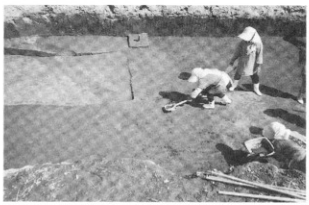
2．溝跡

SD3（第6図）

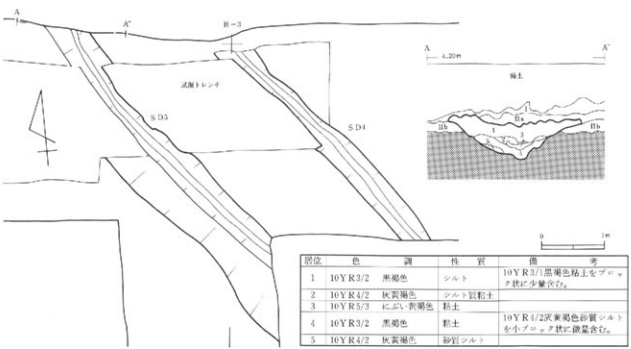
調査区西部、A・B－2・3グリットにかけて検出された。SD8と重複関係にあり、切っていることから本遺構が新しい。方向は、N－37°－Wである。上端幅は140～180cm、下端幅は10～20cm、深さ約60cm、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。断面形は「V」字形に近く、壁は幅の狭い底面から大きく開きながら立ち上がる。堆積土は5層からなり、いずれも自然堆積層である。出土遺物はない。溝の性格は不明である。

SD4（第6図）

調査区西部、A・B－3グリットにかけて検出された。SD8と重複関係にあり、切っていることから本遺構が新しい。方向は、N－40°－Wである。上端幅は約70cm、下端幅は13～24cm、深さ約20cm前後、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。堆積土はSD3と同じである。出土遺物はない。溝の性格は不明である。



SD4　確認作業



層位	色調	性質	備考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR3/1黒褐色粘土をブロック状に少量含む。
2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	
3	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	
4	10YR3/2　黒褐色	粘土	10YR4/2灰黄褐色砂質シルトを小ブロック状に微量含む。
5	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	

第6図　SD3・4平面・断面図

第２節　Ⅲ層の遺構と遺物

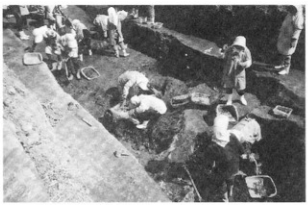
１．遺構の概要

Ⅲ層は調査区全域にわたり分布しているが、調査区中央部（Ｂ－５グリット）から東部にかけて重機と人力で除去してしまい、平面的な精査はできなかった。遺構は調査区西側にしかなく、Ⅲ層中で溝跡４条、土坑１基を確認したが、断面観察によればほとんどがⅢ層上面から掘り込まれたものであった。時期は中世でも新しいと考えられる。

２．溝跡

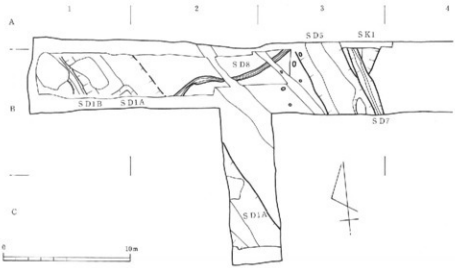
ＳＤ１Ａ（第９図）

調査区西端部、Ａ・Ｂ－１・２、Ｃ－２・３グリットにかけて検出された。ＳＤ１ＢとＳＤ２と重複関係にあり、切っていることから本遺構が新しい。方向は、Ｎ－35°－Ｗである。上端幅は340～400㎝、下端幅は約200㎝、深さは約100㎝、底面は、比較的平坦であるが、調査区の南側で深さ約25㎝の土坑状の窪みが検出された。断面形はＵ状を呈し、底面からゆるやかに立ち上がる。堆積土は９層からなり、いずれも自然堆積層である。出土遺物は、ＳＤ１Ｂ・ＳＤ２と同遺構と考え調査したためＳＤ１Ｂ・ＳＤ２と混じっているが、図示できたのがロクロ調整後底部内面にナデが施された土師質土器、手づくね手法で製作された土師質土器、龍泉窯系の青磁の碗、肥前の染付の皿、岸窯系のＵ、常滑の甕、漆器の椀、砥石である。手づくね手法の土師質土器については、底部は丸底風平底



ＳＤ１Ａ調査風景（Ａ・Ｂ－１・２グリッド）

ＳＤ１Ａ調査風景（Ｃ－２・３グリッド）

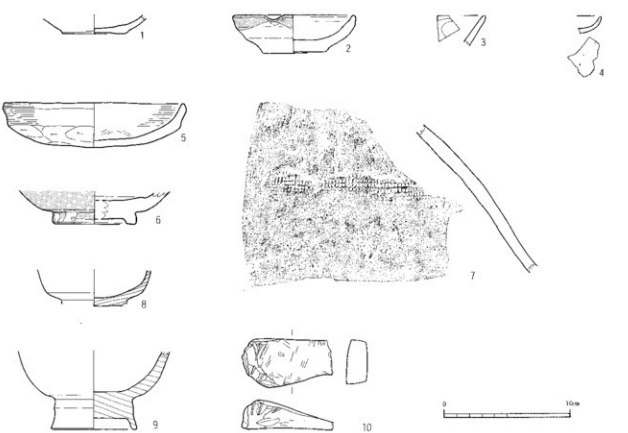


第７図　Ⅲ層上面全体図

で、口縁部にヨコナデ調整を施し、口縁部と底部の境に明瞭な屈曲をもつ。岸窯系の陶器については、片口の付く丸皿で、体部外面下部から底部にタール状の付着物があった。17世紀後半のものである。他にも東海地方産の陶器や土師器の甕などが出土している。溝の規模からすると屋敷に関わる溝か基幹の水路と考えられる。

SD1B（第9図）

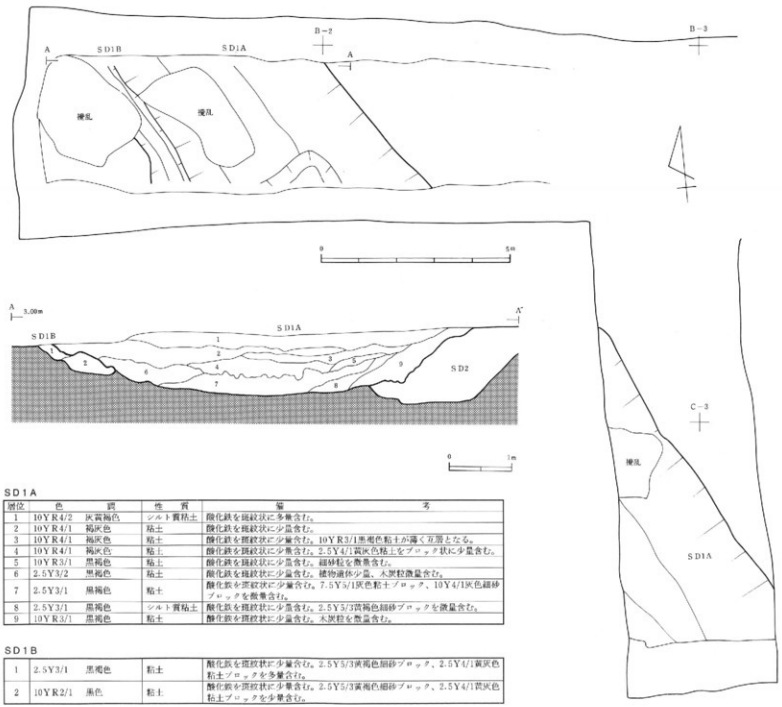
調査区西端部、A・B－1・2、C－2・3グリットにかけて検出された。SD1Aと同遺構と考え調査したが、断面観察の結果違う遺構であることが判明し、SD1Bと名付けた。SD1Aと重複関係にあり、切られていることから本遺構が古い。方向は、N－35°－Wである。北西部は攪乱により破壊されているが、上端幅は約155cmと推測され、下端幅は約55cm、深さは約52cm、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。断面形は皿状を呈し、底面からゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層からなり、堆積土の状況からみて、いずれも人為堆積層と考えられる。SD1Aにほとんど切られていることから、何のための溝かは不明である。



No.	写真図版	出土地点・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	色調	特徴
1	36－1	SD1・2 上層	土師質土器	小皿	下半2/3	?	5.1	?	にぶい橙色	体部内外ヨコナデ、底部回転糸切
2	36－7	SD1・2 上・下層	陶器	皿（片口）	1／2	9.8	5.1	3.1	(釉)オリーブ黒(器面)灰色	岸窯系、体部外面下部～底部にタール状の付着物あり、17世紀後半
3	36－3	SD1・2 上層	磁器(青磁)	碗	口縁小片	?	?	?	灰オリーブ	染泉窯系、劃花文、13世紀
4	36－4	SD1・2 下層	磁器(染付)	皿	口縁小片	?	?	?	白磁、18世紀?	
5	36－2	SD1・2 下層	土師質土器	皿	1／3	(14.2)	－	3.5	(内)黒褐色(外)にぶい褐色	(内)口縁部ヨコナデ、体部ナデ(外)口縁部ヨコナデ、体部下持へラケズリ
6	36－5	SD1・2 下層	磁器(青磁)	碗?	下半1/3	?	(6.6)	?	(釉)灰オリーブ	龍泉窯系、13世紀
7	36－6	SD1・2 下層	陶器	甕	破分	?	?	?	灰黄色	常滑、押印あり
8	36－8	SD1・2 下層	木製品	漆器椀	下半	?	?	?	－	(内)黒漆上ぶ赤漆　(外)黒漆
9	36－9	SD1・2 下層	木製品	漆器椀	下半1/4	?	6.8	?		(内・外)黒漆

No.	写真図版	出土地点・層位	種別	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
10	36－10	SD1・2 下層	石製品、砥石	端部欠損	(7.2)	2.8～3.8	0.6～2.4	77.0	

第8図　SD1A・1B・2出土遺物



SD1A

層位	色調	性質	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を斑紋状に多量含む。
2	10YR4/1	褐灰色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。
3	10YR4/1	褐灰色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。10YR3/1黒褐色粘土が薄く互層となる。
4	10YR4/1	褐灰色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。2.5Y4/1黄灰色粘土をブロック状に少量含む。
5	10YR3/1	黒褐色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。細砂粒を微量含む。
6	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。植物遺体少量、木炭粒微量含む。
7	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。7.5Y5/1灰色粘土ブロック、10Y4/1灰色細砂ブロックを微量含む。
8	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。2.5Y5/3黄褐色細砂ブロックを微量含む。
9	10YR3/1	黒褐色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。木炭粒を微量含む。

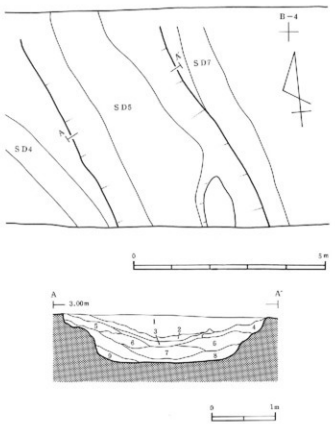
SD1B

1	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。2.5Y5/3黄褐色細砂ブロック、2.5Y4/1黄灰色粘土ブロックを多量含む。
2	10YR2/1	黒色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。2.5Y5/3黄褐色細砂ブロック、2.5Y4/1黄灰色粘土ブロックを少量含む。

第９図　ＳＤ１Ａ・１Ｂ平面・断面図

SD5（第10図）

調査区西部、A・B－3グリットにかけて検出された。SD7とSK3と重複関係にあり、SD7に切られ、SK3を切っていることから本遺構はSD7より古く、SK3より新しい。方向は、N－25°－Wである。上端幅は約325cm、下端幅は110～120cm、深さ約70cm、底面は、やや凹凸があるが比較的平坦である。東壁部に底面から約10cmのところに最大幅約80cmの平坦部が検出された。断面形は逆台形に近く、壁は幅の広い底面からゆるやかに立ち上がる。堆積土は9層からなり、いずれも自然堆積層である。出土遺物は、図示できたのが瀬戸の天目茶碗である（第11図）。他に磨滅のため図示できなかったがロクロ調整の土師器の甕が出土している。底面のレベルは調査区内ではほとんど高低差はないが、下層が細砂と粘土の互層になっていることから水路の可能性が高く、周辺の地形から考えて北西から南東へ流れていたと推測される。



層位	色調	性質	備考
1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	
2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	
3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	
4	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	
5	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	
6	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	10YR4/2灰黄褐色粘土を中間層に斑状に少量含む。
7	10YR2/1　黒色	泥炭質粘土	10YR4/2灰黄褐色粘土を斑状に少量含む。
8	5YR2/1　黒褐色	粘土	2.5YR1.7/1黒色粘土をブロック状に少量含む。
9	5YR5/2　灰褐色 5YR2/1　黒褐色	細砂 粘土	互層

第10図　SD5平面・断面図

No.	写真図版	出土地点・層位	種別	器種	遺存度	法量 cm 口径	底径	器高	色調	特徴
1	37－1	SD5　下層	陶器	天目茶碗	底部のみ	?	4.2	?	(釉)黒色 (断面)灰色	瀬戸、14世紀～

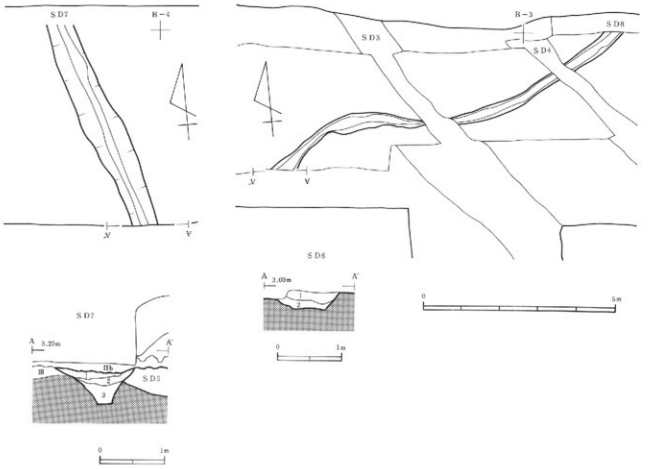
第11図　SD5出土遺物

SD7（第12図）

調査区西部、A・B－3グリットにかけて検出された。SD5とSK3と重複関係にあり、それらを切っていることから本遺構はSD5、SK3より新しい。方向は、N－17°－Wである。SD5との切り合いにより明確ではないが、上端幅は推定約120cm、下端幅は15～30cm、深さ約52cm前後、底面は、やや凹凸があるが比較的平坦である。断面形は逆台形に近く、壁は底面から急角度で立ち上がり、その上方で外に開いている。堆積土は南北によって異なっているが、いずれも自然堆積層である。出土遺物は図示できるものはないが、ハケメ調整の甕とロクロ調整の甕が出土している。調査区内の高低差は12cmであり、下層が細砂と粘土の互層になっていることから、北から南へ流れている水路と考えられる。

SD8（第12図）

調査区西部、A・B－2・3グリットにかけて検出され、湾曲しながら北東から南西方向に伸びる。SD3とSD4と重複関係にあり、それらに切られていることから本遺構はSD3、SD4より古い。方向は大体、N－72°－Eである。上端幅は15～50cm、下端幅は6～30cm、深さ2～8cm、底面は、やや凹凸があるがほぼ平坦である。断面形は、逆台形に近く、壁は底面との境が明瞭で、そこから直線的に立ち上がる。堆積土は2層からなり、いずれも自然堆積層である。出土遺物はない。溝の性格は不明である。



SD7

層位	色調	性質	備考
1	7.5YR3/2　黒褐色	シルト	
2	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	
3	10YR2/3　黒褐色 10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土 軽砂	互層

SD8

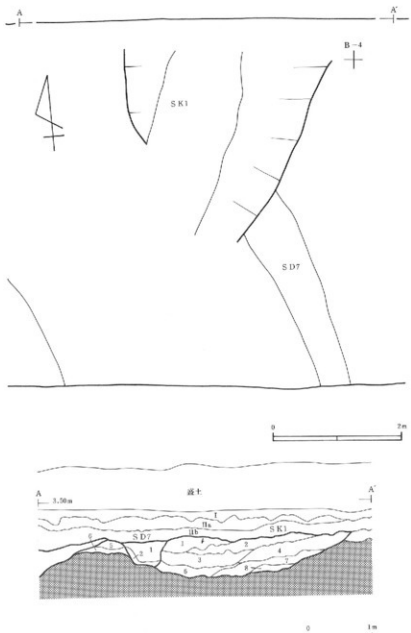
層位	色調	性質	備考
1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	
2	10YR2/3　黒褐色	シルト	

第12図　SD7・8平面・断面図

3．土坑

SK1（第13図）

調査区西部、AB－3グリットにかけて検出された。SD5とSD7と重複関係にあり、それらに切られていることから本遺構が古い。SD5とSD7に切られ、調査区北側に広がっていくため平面形は明確ではないが、方向はN－4°－E、短軸320cmの楕円形と推測され、深さ53cmである。堆積土は8層からなり、いずれも自然堆積層である。出土遺物は図示できるものはないが、ロクロ調整の土師器の甕が出土している。



層位	色調	性質	備考
1	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	
2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	10YR4/6褐色粘土をブロック状に含む。
3	10YR1.7/1 黒色	粘土	
4	5YR2/2　黒褐色	粘土	
5	7.5YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	
6	7.5YR2/2　黒褐色	粘土	
7	7.5YR2/3　極暗褐色	粘土	
8	7.5YR3/3　暗褐色	粘土	

第13図　ＳＫ１平面・断面図

第3節　N層の遺構と遺物

1．遺構の概要

N層は調査区中央部（B－5グリット）より東側に分布している。N層上面から溝跡4条、井戸跡2基、そして、N層上面～中から掘立柱建物跡13棟・柱列跡6列を確認した。なお、ほとんどがN層上面からの掘り込みである。遺構の時期は中世でも古いと考えられる。

2．溝跡

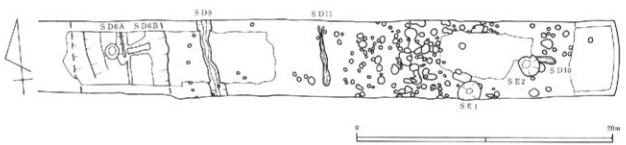
SD6A（第15図）

調査区中央部、A・B－4・5グリットにかけて検出された。SD6Bと重複関係にあり、SD6Bを切っていることから本遺構はSD6Bより新しい。方向は、N－1°－Wである。上端幅は約570cm、下端幅は約150cm、深さ約120cm、底面に長軸125cm、短軸115cm、深さ15cmの楕円形の窪みが確認された。断面形は逆台形を呈し、壁は幅広い底面からゆるやかに立ち上がる。堆積土は12層からなり、いずれも自然堆積層である。断面図のAは、埋没途中のくぼみにたまった土（黒褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色シルトをブロック状に微量含む）である。SD6Bと同遺構として調査したため出土遺物は混じっているが、図示できたのが龍泉窯系の青磁の碗、ロクロ調整の土師質土器、刀子、茶臼である（第16図）。他にもロクロ調整の土師器の坏や甕、在地や常滑の陶器が出土している。本遺構はSD6Bを掘り直した溝と考えられ、中世の屋敷や城館を区画する溝と推定される。

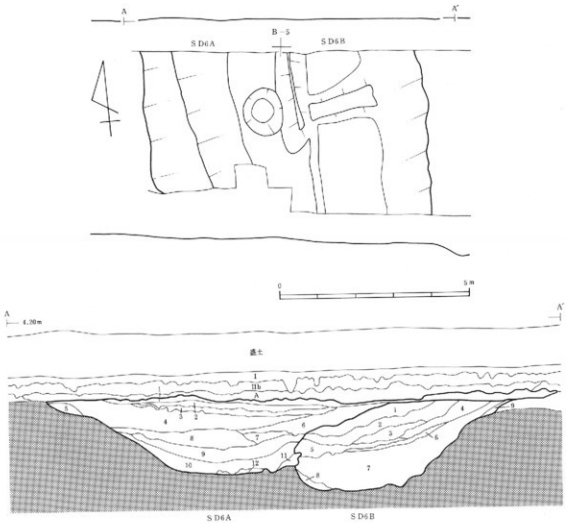
SD6B（第15図）

調査区中央部、A・B－4・5グリットにかけて検出された。SD6Aと同遺構と考え調査したが、断面観察の結果違う遺構であることが判明し、SD6Bと名付けた。SD6Aと重複関係にあり、切られていることから本遺構が古い。方向はSD6Aと同じN－1°－Wである。上端幅は推定約400cm、下端幅は約130cm、深さ約140cm、底面に東西方向に畝状の高まりがあり、高さは西側が20cm、東側が27cmと東に行くほど高くなっている。断面形は「U」字形を呈し、壁はゆるやかに立ち上がり、大きく外傾している。。堆積土は9層からなり、いずれも自然堆積層である。調査区が狭く、畝状の高まりが1条しか確認できていないため明確ではないが、畝堀や堀障子の可能性も考えられる。また、このような堀は中世の屋敷や城館に多く認められることから、本遺構も屋敷や城館を区画する溝と推定される。

SD6A・6B調査風景



第14図　N層上面全体図



SD6A

層位	色	調	性 質	備 考
1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	木炭粒を微量含む。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	10YR5/4にぶい黄褐色シルト、10YR3/1黒褐色シルトを小ブロック状に微量含む。
3	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	10YR4/2灰黄褐色粘土をブロック状に少量含む。
4	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色細砂、10YR3/1黒褐色粘土を小ブロック状に微量含む。
5	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	
6	10YR3/1	黒褐色	粘土	酸土粒・木炭粒を少量含む。
7	10YR3/1	黒褐色	粘土	10YR4/2灰黄褐色シルトと部分的に互層となる。木炭粒を微量含む。
8	10YR3/2	黒褐色	粘土	10YR4/3にぶい黄褐色細砂、10YR3/1黒褐色シルトをブロック状に少量含む。
9	10YR4/1	褐灰色	粘土	
10	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	2.5Y2/1黒色粘土が薄い互層になっている。
11	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	10Y4/1灰色細砂と部分的に互層となる。
12	10Y4/1	灰色	細砂	2.5Y3/1黒褐色粘土をブロック状に多量含む。

SD6B

層位	色	調	性 質	備 考
1	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色細砂をブロック状に微量含む。木炭粒を微量含む。
2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	10YR3/1黒褐色粘土をブロック状に微量含む。
3	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	2.5Y5/2暗灰黄色細砂をブロック状に少量含む。
4	10YR3/2	黒褐色	粘土	2.5Y5/2暗灰黄色粘土をブロック状に微量含む。
5	2.5Y3/1 2.5Y4/2	黒褐色 暗灰黄褐色	粘土 粘土	互層
6	5Y4/1	灰色	粘土	
7	2.5Y4/1 2.5Y3/1	灰色 黒褐色	粘土 粘土	互層。部分的に2.5Y2/1黒色粘土、7.5Y4/2灰オリーブ細砂をブロック状に少量含む。
8	10Y4/1 2.5Y3/1	灰色 黒褐色	細砂 粘土	互層
9	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	

第15図　SD6A・6B平面・断面図

（註）

1．市内では今泉城跡（渡部：1995）、北目城跡（金森：1994）、洞ノ口遺跡（仙台市史編さん委員会：1995）で確認されている。

No.	写真図版	出土地点・層位	種別	器種	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調	特徴
1	37－2	SD6 下層	磁器（青磁）	碗	口縁小片	?	?	?	（釉）灰色	景徳鎮系、劃花文、12世紀後半～
2	37－3	SD6 下層	土師質土器	小皿	底部小片	?	?	?	にぶい橙色	（内・外）ロクロ調整、底部回転糸切

No.	写真図版	出土地点・層位	種別	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
3	37－4	SD6 下層	鉄製品、刀子	小刃	(4.5)	1.3	0.3	5.3	
4	37－5	SD6 下層	石製品、茶臼	1／7	径 ?		(9.5)	919.0	下臼

第16図　ＳＤ６Ａ・６Ｂ出土遺物

ＳＤ９（第17図）

調査区中央部、Ａ・Ｂ－５グリットにかけて検出された。方向は、Ｎ－７°－Ｗである。上端幅は約125cm、下端幅は20～40cm、深さ約40cm前後、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。断面形は、「Ｕ」字形を呈し、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。堆積土は単層である。出土遺物はない。一部の掘立柱建物跡と同方向にあり、区画のための溝と推定される。

ＳＤ10（第19図）

調査区東部、Ｂ－８グリットにかけて検出された。方向は、Ｎ－76°－Ｗである。ＳＥ２と重複関係にあり、ＳＥ２に切られていることから本遺構が古い。上端幅は約35～45cm、下端幅は25～35cm、深さは約30cm前後である。堆積土は２層からなり、１層は7.5ＹＲ3/2黒褐色シルト、２層は7.5ＹＲ2/2黒褐色粘土質シルトで7.5ＹＲ4/3にぶい赤褐色粘土質ブロックをブロック状に少量含み、いずれも自然堆積層である。出土遺物は図示できるものはないが、ロクロ調整の土師器の坏や赤焼土器が出土している。ＳＥ２と試掘トレンチの影響で確認した長さが短いため、明確ではないが土坑の可能性も考えられる。

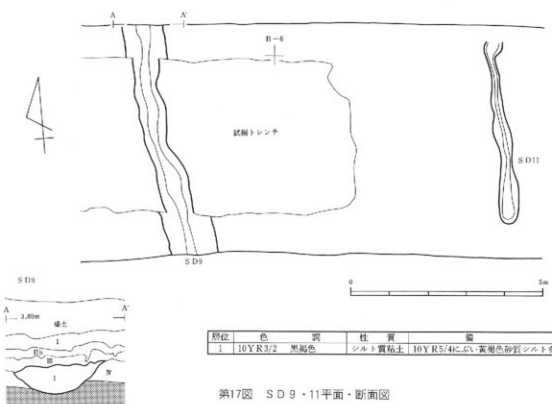
ＳＤ11（第17図）

調査区中央部、Ａ・Ｂ－６グリットにかけて検出された。方向は、Ｎ－２°－Ｗである。上端幅は約20～50cm、下端幅は７～30cm、深さ約23cm前後、底面は、やや凹凸があるが平坦である。堆積土は基本層Ｎ層が堆積している。出土遺物はない。ＳＤ９同様に一部の掘立柱建物跡と同方向にあり、区画のための溝と推定される。

３．井戸跡

ＳＥ１（第19図）

調査区東部、Ｂ－７グリットにかけて検出された。ＳＢ13－Ｐ98と重複関係にあり、切っていることからＳＢ13より本遺構が新しい。南部で調査区外に出るため全体の形は確認できないが直径約180cmのほぼ円形で、深さは184cmである。断面形は、上半部は外に向かって大きく開き、下半部で崩落のためか外側に大きくふくらんでいる。堆



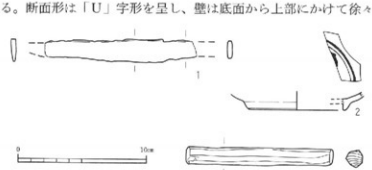
層位	色　調	性　質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に含む。

第17図　ＳＤ９・11平面・断面図

積土は５層からなり、第２層が人為堆積層で、その他の層は自然堆積層と考えられる。出土遺物は、図示できたのが刀子である（第18図１）。他にロクロ調整の土師器の甕が出土している。

ＳＥ２

調査区東部、Ｂ－８グリットにかけて検出された。ＳＤ10と重複関係にあり、切っていることから本遺構が新しい。平面形は楕円形であり、直径165cm前後である。断面形は「Ｕ」字形を呈し、壁は底面から上部にかけて徐々に広がっている。堆積土は５層からなり、３～５層は自然堆積層、１・２層は人為堆積層と考えられる。出土遺物は、図示できたのが中国産染付の皿、断面七角形の棒状の木製品（用途不明）である（第18図２・３）。他にロクロ調整の土師器の坏や甕、常滑産の陶器が出土している。

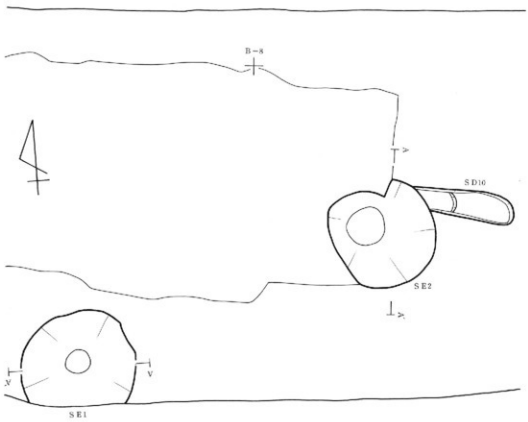


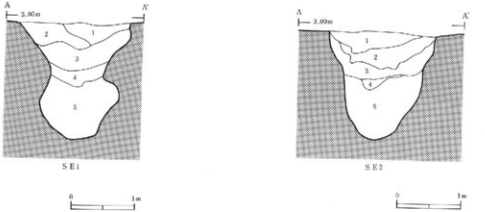
No.	写真図版	出土地点・遺構	種　別	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特　徴
1	38－2	Ｂ－７　ＳＥ１	鉄製品、刀子	両端欠損	(11.9)	1.4～1.8	0.4	18.0	両関

No.	写真図版	出土地点・遺構	種　別	器　種	遺存度	法　量 (cm) 口径	底径	器高	色　調	特　徴
2	38－1	Ｂ－８　ＳＥ２	磁器（染付）	皿	底部小片	？	(7.5)	？		中国、16世紀後半

No.	写真図版	出土地点・遺構	種　別	遺存度	長さ (cm)	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特　徴
3	38－3	Ｂ－８　ＳＥ２	木製品、用途不明	一部欠損	11.5	1.2～1.3	－	－	（棒状）断面七角形

第18図　ＳＥ１・２出土遺物





SE1

層位	色　　調	性　　質	備　　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR3/1黒褐色わら灰？、10YR4/2灰黄褐色砂質シルト、2.5Y5/2暗灰黄色粘土が部分的に互層になる。木炭粒を少量含む。
2	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR4/2灰黄褐色砂質シルト、2.5Y5/2暗灰黄色粘土をブロック状に多量に含む。人為的埋土。木炭粒を少量含む。
3	2.5Y3/1　黒褐色	粘土質シルト	10YR3/1黒褐色わら灰？、7.5YR褐色微土が部分的に互層とブロックで混入。
4	2.5Y3/1　黒褐色	粘土質シルト	
5	10YR3/1　黒褐色	粘土	部分的に5YR1.7/1黒色泥炭質粘土が互層に含む。

SE2

層位	色　　調	性　　質	備　　考
1	2.5Y3/1　黒褐色	シルト	10YR4/2灰黄褐色粘土、10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト、10YR3/1黒褐色粘土をブロック状に多量含む。
2	10YR4/1　褐灰色	粘土	10YR2/2黒褐色粘土が層状・ブロック状に混入。
3	10YR3/1　黒褐色	粘土	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト、10YR4/1褐灰色粘土をブロック状に少量含む。
4	10YR2/1　黒色	粘土	10YR3/1黒褐色粘土をブロック状に少量含む。
5	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	10YR2/1黒色粘土、10YR4/1灰色細砂をブロック状に少量含む。

第19図　SD10・SE1・2平面・断面図

４．掘立柱建物跡、柱列跡、ピット

調査区東半部において約190個のピットを確認した。ピットはＳＤ６東側から調査区東端にまで及んでいるが、特にＡ・Ｂ－７グリッド付近に集中している。確認面はⅣ層上面～Ⅳ層中である。調査区の壁面の観察によると、僅かにⅢ層上面から掘り込まれたものもあるが、大部分はⅣ層上面から掘り込まれたものと推定される。

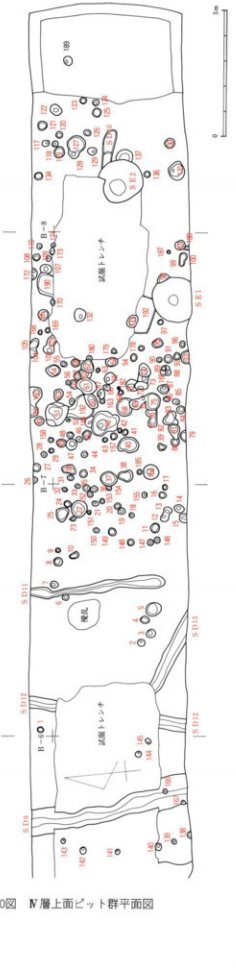
これらの各ピットは、調査中はそれぞれの関係が不明であったが、調査後に切り合い関係や間隔などを考慮して検討した結果、掘立柱建物跡13棟（ＳＢ１～13）、塀跡あるいは柵跡と考えられる一本柱列跡６列（ＳＡ１～６）が復元できた。なお、掘立柱建物跡と一本柱列については、組合うと推定されるものを便宜上一緒に記述することとする。

（１）ＳＢ１・ＳＡ１（第21・22図、表２・３）

ＳＢ１　東西３間、南北１間以上の西廂付の建物で、南北棟と推定される。内部には間仕切りが認められる。ＳＢ４、ＳＢ９、ＳＢ10に切られている他、Ｐ192と重複している。方向は身舎の西側柱列でみるとＮ－７°－Ｅである。規模は桁行総長が2.20ｍ以上、梁行総長は6.13ｍである。柱穴は表３に示した通りで、確認できた柱痕跡は４箇所、径は17～18㎝である。柱間は身舎の東西が約８尺、南北が７～８尺、廂の出は４尺である。遺物は土師器片が少量出土したのみで、時期が限定できるものはない。

ＳＡ１　ＳＢ１の南側から西側にかけてほぼ直角に屈曲する一本柱列で、東西２間以上、南北１間以上の規模を持つ。ＳＢ１とは柱筋は通らないが、ＳＢ１を囲むように配置され、なおかつ南北方向の柱列の方位はＳＢ１と同じくＮ－７°－ＥであるのでＳＢ１とほぼ同時期のものと推定される。柱穴は表２に示した通りで、柱痕跡は確認できなかった。柱間は東西が10～11尺、南北は13.5尺である。ＳＢ１との距離は東西が５尺、南北が約７尺である。遺物は土師器片が数点と砥石が１点（第49図４）出土したのみで、時期が限定できるものはない。

第21図　ＳＢ１・ＳＡ１模式図



第20図　Ⅳ層上面ピット群平面図

第22図　SB1・SA1平面・断面図

ピット No.	掘り方 (cm) 上端径	下端径	深さ	土質	柱痕跡	備考
22	64	51	30	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト ごぶい黄褐色粘土微量、木炭粒少量	——	土師器片2点
15	36	18	20	10YR3/1 黒褐色シルト、木炭粒少量	——	
79	46	30	23	10YR3/1 黒褐色シルト 灰黄褐色砂質シルト少量、焼土粒・木炭粒微量	——	砥石1点
93	50	42	19	10YR3/1 黒褐色シルト、木炭粒微量	——	

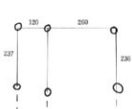
表2　SA1柱穴一覧表

ピット No.	掘り方				柱痕跡		備考
	上端径	下端径	深さ	土質	径	土質	
30	34～58	20～46	23	10YR3/2 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト少量、木炭粒散量		——	土師器片２点
38	48～58	38～46	28	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト にぶい黄褐色シルト多量、にぶい黄褐色粘土多量 木炭粒多量	17	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 灰黄褐色シルト少量 木炭粒散量	
47	42	17	47	同　上	17	同　上	土師器片３点
60	60～80	46～66	37	10YR3/1 黒褐色シルト、焼土粒・木炭粒散量	18	10YR3/1 黒褐色シルト 焼土多量、木炭粒散量	土師器片５点
161	36	20～26	27	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土 にぶい黄褐色砂質シルト少量、木炭粒少量		——	ＳＢ４－Ｐ56、ＳＢ９－Ｐ61に切られる　床束柱
71	44	22	22	10YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト散量、木炭粒散量		——	ＳＢ10－Ｐ72に切られる 土師器片１点
132	48	30	29	10YR3/1 黒褐色シルト 灰黄褐色砂質シルト少量、木炭粒・焼土粒散量	17	10YR3/1 黒褐色シルト 焼土粒・木炭粒多量	深さは試掘トレンチ底面からの数値
133	38～48	23～32	37	10YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト散量、木炭粒散量		——	Ｐ－192と重複、新旧関係不明 深さは試掘トレンチ底面からの数値

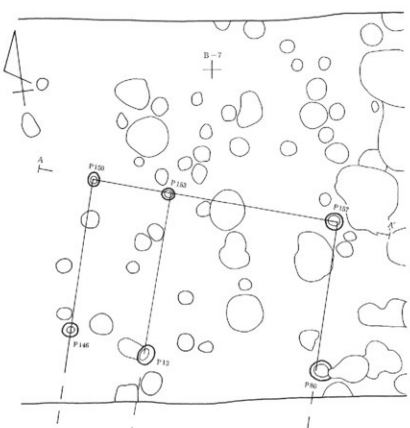
表３　ＳＢ１柱穴一覧表

（２）ＳＢ２（第23・24図、表４）

東西２間、南北１間以上の西廂付の建物で、南北棟と推定される。ＳＢ８に切られている他、ＳＢ11とも重複している。方向は身舎の東側柱列でみるとＮ－15°－Ｅである。規模は桁行総長が2.37ｍ以上、梁行総長は3.80ｍである。柱穴は表４に示した通りで、柱痕跡は確認できなかった。柱間は身舎の東西が約8.5尺、南北が約８尺、廂の出は４尺である。遺物は土師器片が少量出土したのみで、時期が限定できるものはない。



第24図　ＳＢ２模式図



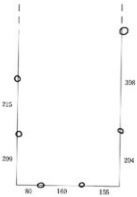
第23図
ＳＢ２平面・断面図

ピット No.	掘り方				柱痕跡	備考
	上端径	下端径	深さ	土質		
150	16～20	10	28	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土散量	——	
146	23	12	48	同　上	——	
153	18	12	14	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土	——	
13	32	13～20	38	10YR3/1 黒褐色シルト、木炭粒少量	——	ＳＢ11－Ｐ12と重複、新旧不明
157	26	18	19	10YR2/2 黒褐色シルト	——	
80	34	21	29	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒散量	——	ＳＢ８－Ｐ81に切られる 土師器片４点

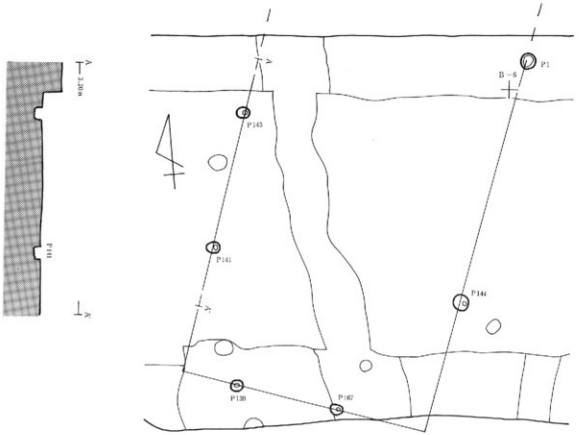
表４　ＳＢ２柱穴一覧表

（3）ＳＢ３（第25・26図、表５）

東西３間、南北３間以上の南北棟である。検出できなかった柱穴が多いが西廂付の建物と推定した。ＳＤ９に切られている。方向は身舎の東側柱列でみるとＮ－19°－Ｅである。規模は桁行総長6.02ｍ以上、梁行総長が3.95ｍである。柱穴は表５の通りで柱痕跡は確認できなかった。柱間は身舎の東西が約５尺、南北が6.5～７尺、廂の出は約2.5尺である。出土遺物は無い。



第25図
ＳＢ３模式図



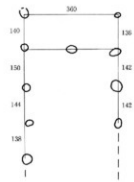
第26図　ＳＢ３平面・断面図

ピット No.	上端径	下端径	深さ	堆積方位 土質	柱痕跡	備考
143	18	8	13	10YR3/1 黒褐色粘土 にぶい黄褐色細砂少量、木炭粒微量	――	深さは試掘トレンチ底面からの数値
141	20	6	6	10YR3/2 黒褐色粘土 にぶい黄色細砂微量、木炭粒微量	――	深さは試掘トレンチ底面からの数値
139	18	8	35	10YR3/1 黒褐色粘土 にぶい黄褐色細砂少量、木炭粒微量	――	
167	16	6	39	10YR3/1 黒褐色粘土、にぶい黄褐色細砂少量	――	
144	24	7	17	10YR3/1 黒褐色粘土 にぶい黄褐色細砂少量、木炭粒微量	――	深さは試掘トレンチ底面からの数値
1	22	15～18	24	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土		ＳＤ９に切られる

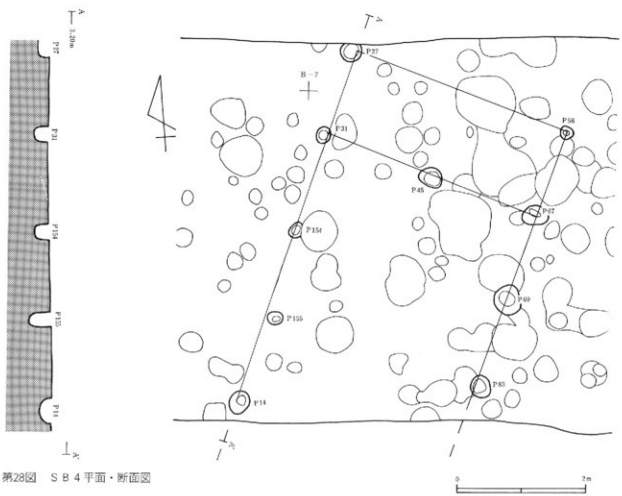
表５　ＳＢ３柱穴一覧表

（4）ＳＢ４（第27・28図、表６）

東西２間、南北４間以上の北廂付の南北棟と推定される。内部に間仕切りがある東西１間の建物の可能性もあるが、東西の柱間隔を考慮して東西２間と推定した。ＳＢ１－Ｐ161を切り、ＳＢ８に切られている他、Ｐ68・70・82とも重複している。方向は西側柱列でみるとＮ－21°－Ｅである。規模は桁行総長5.72ｍ以上、梁行総長は3.60ｍである。柱穴は表６の通りで柱痕跡は確認できなかった。柱間は東西が約６尺、南北が4.5～５尺である。遺物は土師器片が数点出土したのみで、時期が限定できるものはない。



第27図
ＳＢ４模式図



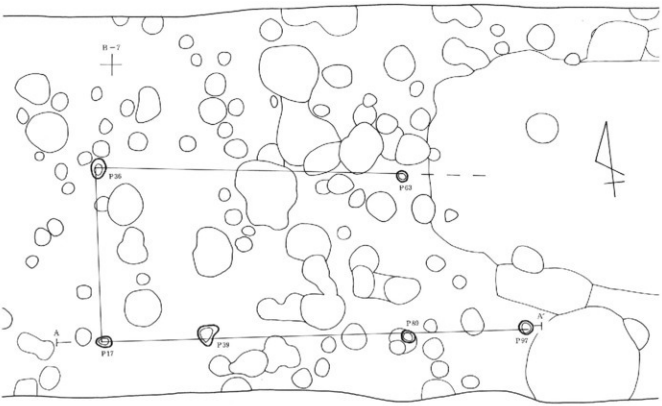
第28図　ＳＢ４平面・断面図

ピット No.	掘り方 上端径	掘り方 下端径	掘り方 深さ	掘り方 土質	柱痕跡	備考
27	31	21	13	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト、木炭粒微量	――	
31	26	11	23	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト少量、木炭粒微量	――	
154	24	10～16	19	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト	――	ＳＢ８－Ｐ37に切られる
155	20	12	29	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト質粘土	――	
14	30～38	14	18	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト、木炭粒微量	――	
45	30～36	24	27	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト、木炭粒微量	――	
56	20	10	10	10ＹＲ3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量	――	ＳＢ１－Ｐ161を切る
67	30～40	10～22	25	同　上	――	Ｐ163を切る
69	38	20～25	11	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト 灰黄褐色砂質シルト少量、木炭粒・焼土粒微量	――	Ｐ68・70と重複、新旧関係不明 土師器片２点
83	34	18	14	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量	――	Ｐ82と重複、新旧関係不明

表６　ＳＢ４柱穴一覧表

（5）ＳＢ５・６、ＳＡ２（第29～32図、表７～９）

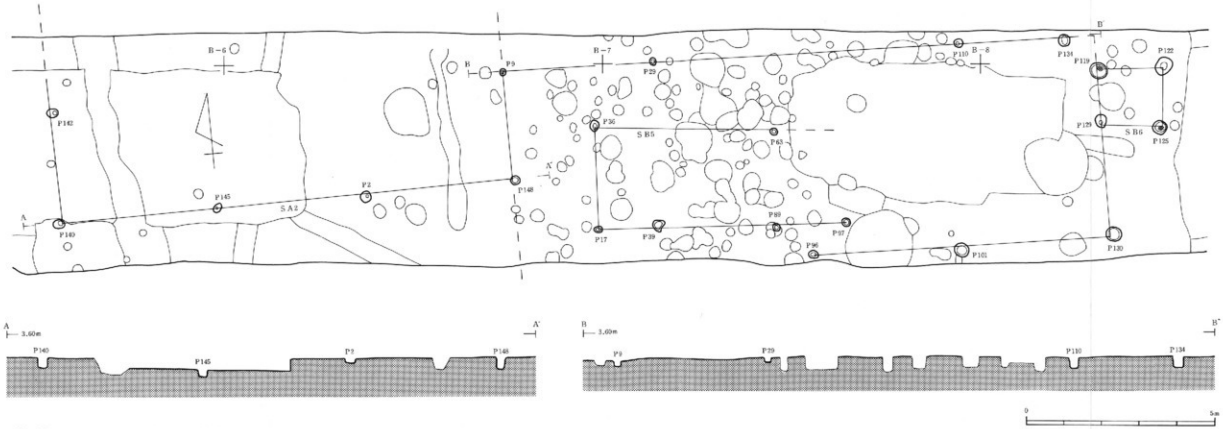
ＳＢ５　東西３間以上、南北１間の東西棟である。ＳＢ９を切っている。方向は南側柱列でみるとＮ－87°－Ｗである。規模は桁行総長6.54ｍ以上、梁行総長は2.71ｍである。柱穴は表７の通りで柱痕跡は確認できなかった。柱間は南北は約９尺であるが、東西が西から順に5.5尺、10尺、６尺とばらつきがある。遺物は土師器片が１点出土したのみで、時期が限定できるものはない。



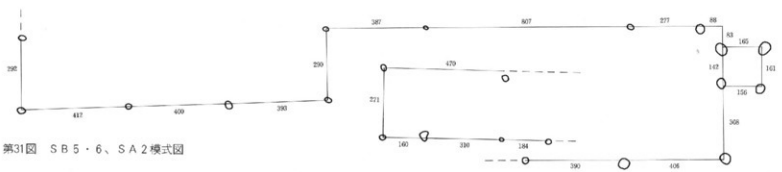
第29図　ＳＢ５平面・断面図

ピット No.	堀り方（m） 上端径	下端径	深さ	土質	柱痕跡	備考
36	22～30	12～18	27	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト、鮫土粒・木炭粒微量	——	
63	18	12	8	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量	——	
17	18～24	12～16	40	10ＹＲ3/1 黒褐色粘土質シルト	——	
39	34	24	17	10ＹＲ3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量	——	
89	20	12	22	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト、木炭粒微量	——	ＳＢ９－Ｐ165を切る 土師器片１点
97	22	15	9	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量	——	

表７　ＳＢ５柱穴一覧表



第30図　ＳＢ５・６、ＳＡ２平面・断面図



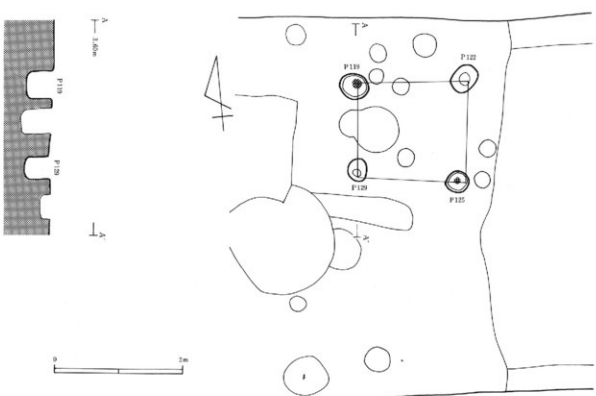
第31図　ＳＢ５・６、ＳＡ２模式図

ピット No.	掘り方 cm 上端径	下端径	深さ	土質	柱痕跡	備考
142	24～28	12	19	10YR3/1 黒褐色粘土、にぶい黄褐色細砂少量 木炭粒微量	――	深さは試掘トレンチ底面からの数値
140	22～28	14	34	10YR3/2 黒褐色粘土、にぶい黄褐色細砂微量 木炭粒微量	――	
145	14～25	5～8	16	10YR3/1 黒褐色粘土、にぶい黄褐色細砂少量	――	深さは試掘トレンチ底面からの数値
2	26	8	14	10YR3/2 黒褐色シルト	――	
148	24	22	27	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土微量	――	
9	16	12	13	10YR3/2 黒褐色シルト、にぶい黄褐色砂質シルト少量 木炭粒微量	――	土師器片１点
29	17～20	12～14	8	10YR3/2 黒褐色シルト	――	
110	22	10	24	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量	――	
134	30～34	20～27	27	同　上	――	
130	38	28	21	10YR3/2 黒褐色シルト、暗褐色砂質シルト少量	――	
101	36	24～28	14	10YR3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量	――	P188を切る
96	22～26	11～16	13	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量	――	

表８　ＳＡ２柱穴一覧表

ＳＢ６　東西１間、南北１間の建物で、後述するＳＡ２と接続することから門跡の可能性がある。方向は北側柱列でみるとＳＢ５と同じくＮ－87°－Ｗである。柱穴は表９に示した通りで、確認できた柱痕跡は２箇所で径は10～15cmである。柱間は東西・南北共に4.5～5.5尺の正方形である。遺物は龍泉窯系の青磁碗が１点出土している。（第49図１）

ＳＡ２　屈曲しながら東西に長く延びる一本柱列である。ＳＢ６の西側柱列に接続しながらＳＢ５の周囲を囲み、ＳＢ５の西側ではその北側の空間を「コ」字状に囲むようにしてさらに北へ延びている。Ｐ188を切っている。方向はＳＢ５の北側付近ではＥＷである。規模は東西が27.64ｍ、南北が5.33ｍ以上である。柱穴は表８の通りで、柱痕跡は確認できなかった。柱間は一部で検出できなかった柱穴もあるが、東西13尺、南北はＳＢ５よりも西側の部分では約9.5尺である。遺物は土師器片が１点出土したのみで、時期が限定できるものはない。



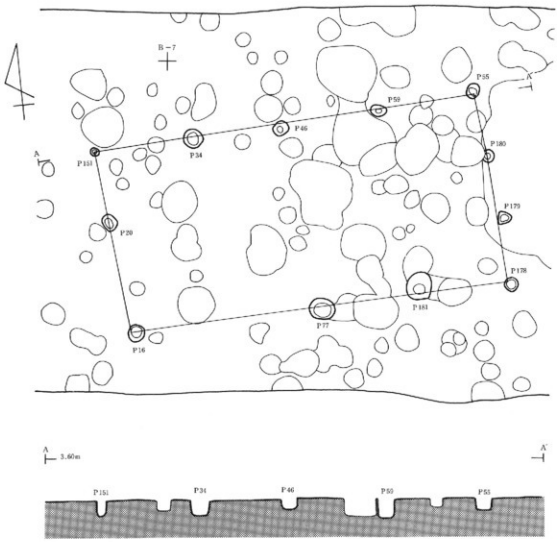
第32図　ＳＢ６平面・断面図

ピット No.	掘り方 cm 上端径	下端径	深さ	土質	柱痕跡 cm 径	土質	備考
119	43	36	34	10YR3/1 黒褐色シルト に.い.黄褐色砂質シルト・木炭粒微量	15	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト	
122	34～47	16～20	38	10YR3/1 黒褐色シルト、木炭粒微量		――	青磁碗１点
129	28～34	11	28	10YR3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量			
125	38	39	33	10YR3/1 黒褐色シルト に.い.黄褐色砂質シルト・木炭粒微量	10	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 木炭粒少量	

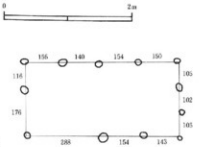
表９　ＳＢ６柱穴一覧表

（６）ＳＢ７（第33・34図、表10）

東西４間、南北３間の東西棟である。ＳＢ８・10、Ｐ73に切られている他、Ｐ76と重複している。方向は北側柱列でみるとＮ－85°－Ｅである。規模は桁行総長5.85～6.00ｍ、梁行総長は2.92ｍ～3.12ｍである。柱穴は表10の通りで、柱痕跡は確認できなかった。柱間は東西が約５尺、南北が約3.5尺である。遺物は土師器片が数点出土したのみで、時期が限定できるものはない。



第33図　ＳＢ７平面・断面図



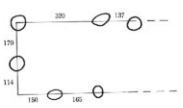
第34図
ＳＢ７模式図

ピット No.	上端径	下端径	深さ	堆積方向	堆積土質	柱痕跡	備考
151	14	8~10	17		10YR3/1 黒褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土微量		
34	31	18~21	24		10YR3/2 黒褐色シルト、にぶい黄褐色砂質シルト少量 木炭粒微量		土師器片１点
46	24	10	15		10YR3/2 黒褐色シルト、木炭粒微量		
59	19~26	4~10	24		10YR3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量		土師器片１点
55	20~24	12~16	15	同	上		
180	22	10	74		10YR3/1 黒褐色シルト質粘土		ＳＢ８－Ｐ62に切られる
179	22	16	27	同	上		
178	20	17	32	同	上		
183	26	18	34	同	上		
77	36	24	11		10YR3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量		ＳＢ10－Ｐ72、Ｐ73に切られる
16	26~28	18	31		10YR3/1 黒褐色粘土質シルト		Ｐ76と重複、新旧関係不明
20	22~28	12~18	15		10YR3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量		土師器片２点

表10　ＳＢ７柱穴一覧表

（7）ＳＢ８（第35・36図、表11）

東西３間以上、南北２間の東西棟で、南に廂が付く可能性がある。ＳＢ２・４・７、Ｐ82・162・192を切り、ＳＢ９に切られている。方向は北側柱列でみるとＮ－84°－Ｅである。規模は桁行総長4.57ｍ以上、梁行総長は2.84ｍである。柱穴は表11に示した通りで、確認できた柱痕跡は３箇所、径は13～16cmである。柱間は東西が約4.5～5.5尺、南北は北から約5.5尺と3.5尺である。遺物は土師器片少量と刀子が１点出土したのみで（第49図２）、時期が限定できるものはない。

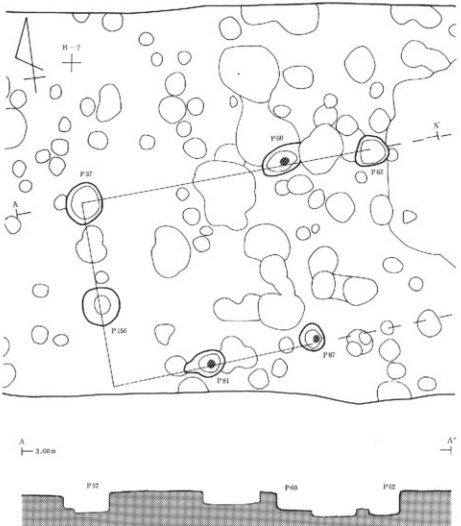


第35図　ＳＢ８模式図

（8）ＳＢ９

（第37・38図、表12）

東西４間以上、南北３間の東西棟で、北・西・南に廂が付く可能性がある。ＳＢ１・８、Ｐ73・162を切り、ＳＢ５・11に切られている他、ＳＢ12と重複関係にある。方向は北側柱列でみるとＮ－83°－Ｅである。規模は桁行総長4.75ｍ以上、梁行総長は4.28ｍである。柱穴は表12に示したが、確認できた柱痕跡は１

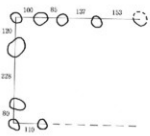


第36図
ＳＢ８平面・断面図

ピット No.	掘り方 (cm) 上端径	下端径	深さ	土質	柱痕跡 (cm) 径	土質	備考
37	56～58	44～53	29	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒散量		――	ＳＢ４－Ｐ154を切る 土師器片３点、刀子１点
60	40～70	30～48	22	10YR3/1 黒褐色シルト 灰黄褐色砂質シルト少量、焼土粒・木炭粒散量	16	10YR3/2 黒褐色シルト 焼土粒・木炭粒少量	ＳＢ９－Ｐ61に切られる、Ｐ192を切る　土師器片１点
62	48	34	23	10YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト少量、木炭粒散量		――	ＳＢ７－Ｐ180、Ｐ162を切る 土師器片６点
156	58	26～30	43	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土			
81	42	34	30	10YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト・木炭粒散量	14	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト	ＳＢ２－Ｐ80、Ｐ82を切る
87	38～43	26～29	30	10YR3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量	13	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 焼土粒少量、木炭粒多量	

表11　ＳＢ８柱穴一覧表

箇所のみで、径は13cmである。柱間は東西が約3～5尺、南北は2.5～7.5尺とばらつきがある。遺物は土師器片が数点出土したのみで、時期が限定できるものはない。



第37図
ＳＢ９模式図

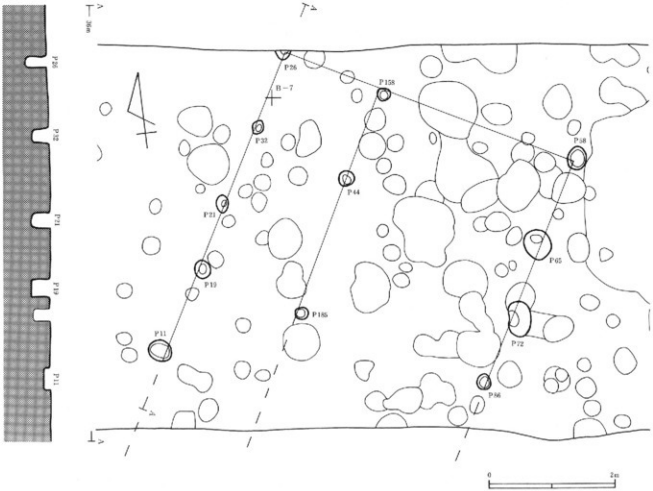
第38図　ＳＢ９平面・断面図

ピット No.	掘り方 上場径	掘り方 下場径	掘り方 深さ	掘り方 土質	柱痕跡 径	柱痕跡 土質	備考
53	34～50	20～36	16	10YR3/2 黒褐色シルト、暗褐色砂質シルト少量	13	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト	
54	48～54	36～42	35	10YR3/1 黒褐色シルト、木炭粒微量			土師器片５点
102	42	20	34	10YR2/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト微量、木炭粒微量		――	ＳＢ12－Ｐ103と重複、新旧関係不明
106	44	24～28	28	10YR3/2 黒褐色シルト、暗褐色砂質シルト少量		――	
172	46	17	32	10YR4/2 灰黄褐色シルト 黒色粘土質シルト少量、木炭粒微量		――	
61	68～85	43～50	35	10YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト少量、木炭粒微量		――	ＳＢ１－Ｐ161、ＳＢ８－Ｐ60、Ｐ－162を切る　土師器片１点
74	44	28～34	39	10YR3/2 黒褐色シルト、暗褐色砂質シルト少量			Ｐ－73を切る　土師器片１点
165	43	20	50	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土		――	ＳＢ11－Ｐ88、ＳＢ５－Ｐ89に切られる
95	36～42	28～32	33	10YR3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量			

表12　ＳＢ９柱穴一覧表

（9）ＳＢ10、ＳＡ３・４（第39～41図、表13・14）

ＳＢ10　東西２間、南北４間以上の西廂付の南北棟である。ＳＢ１、ＳＢ７、Ｐ73を切っている。方向は西側柱列でみるとＮ－26°－Ｅである。規模は桁行総長が5.10ｍ以上、梁行総長は4.94ｍである。柱穴は表13に示した通りで、柱痕跡は確認できなかった。柱間は身舎の東西が10.5尺、南北が４～５尺、廂の出は約６尺である。遺物は土師器片が数点出土したのみで、時期が限定できるものはない。



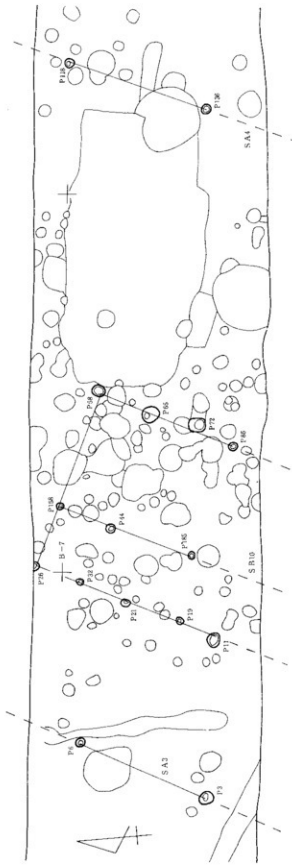
第39図　ＳＢ10平面・断面図

ピット No.	掘り方				柱痕跡	備考
	上端径	下端径	深さ	土質		
11	34～38	22～31	11	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト少量、木炭粒微量	――	
19	25～28	13～16	25	10ＹＲ3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量	――	
21	20～26	8～12	19	10ＹＲ3/2 黒褐色粘土質シルト にぶい黄褐色粘土微量、木炭粒少量	――	
32	13～22	8～12	22	同　上	――	
26	24	12	31	同　上	――	土師器片１点
185	18～20	12	34	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト質粘土	――	
44	26	12～16	11	10ＹＲ3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量	――	
158	20	14	30	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト	――	
86	22～26	16～19	12	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量	――	
72	32	12～24	28	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト、暗褐色砂質シルト少量	――	ＳＢ１－Ｐ71、ＳＢ７－Ｐ181、Ｐ73を切る
65	46	13～16	33	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量	――	土師器片２点
58	30～36	23～28	11	10ＹＲ3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量	――	

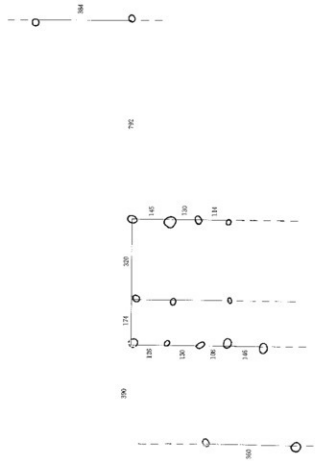
表13　ＳＢ10柱穴一覧表

ＳＡ３　ＳＢ10の西側に位置する一本柱列である。柱穴を２個しか検出していないが、この柱穴を結ぶ方位はＮ－27°－Ｅで、ＳＢ10とほぼ同じである。柱穴は表14の通りで柱痕跡は確認できなかった。柱間は約12尺、ＳＢ10との距離は3.90ｍ（約13尺）である。出土遺物はない。

ＳＡ４　ＳＢ10の東側に位置する一本柱列である。柱穴を２個しか検出していないが、南側のＰ136はＳＢ10の北側妻の柱筋の延長線上にある。方位はＮ－25°－Ｅで、ＳＢ10とほぼ同じである。柱穴は表14の通りで、柱痕跡は確認できなかった。柱間は約13尺である。ＳＢ10との距離は7.92ｍ（約26尺）で、ＳＢ10とＳＡ３との距離の２倍に相当する。出土遺物はない。



第40図　ＳＢ10、ＳＡ３・４平面図



第41図　ＳＢ10、ＳＡ３・４模式図

SA3

ピット No.	堀り方 cm 上端径	下端径	深さ	土質	柱痕跡	備考
3	34～36	16～23	12	10YR3/1 黒褐色シルト、木炭粒微量	――	
6	24	14	19	10YR3/2 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト少量、木炭粒微量	――	

SA4

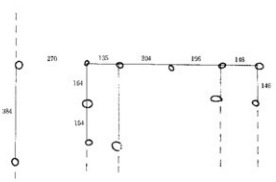
ピット No.	堀り方 cm 上端径	下端径	深さ	埋土	柱痕跡	備考
136	24～26	18～20	21	7.5YR3/2 黒褐色シルト	――	
118	23	10～15	14	10YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト微量、木炭粒微量	――	

表14　ＳＡ３・４柱穴一覧表

(10) ＳＢ11・ＳＡ５（第42・43図、表15）

ＳＢ11　東西４間、南北２間以上の南北棟と推定され、東側と西側に廂が付く。ＳＢ９を切り、ＳＢ13、Ｐ76に切られる他、Ｐ13とも重複関係にある。方向は西側柱列でみるとＮ－25°－Ｅである。規模は桁行総長3.18ｍ以上、梁行総長は6.83ｍである。柱穴は表15の通りで、柱痕跡は確認できなかった。柱間は身舎の東西が約6.5尺、南北が５～5.5尺、廂の出は西側が4.5尺、東側が約５尺である。遺物は土師器片が数点と砥石が１点出土したのみで（第49図５）、時期が限定できるものはない。

ＳＡ５　ＳＢ11の西側に位置する一本柱列である。柱穴を２個しか検出していないが、北側のＰ７はＳＢ11の北側妻の柱筋の延長線上にある。方位はＮ－26°－Ｅで、ＳＢ11とほぼ同じである。柱穴は表15の通りで柱痕跡は確認できなかった。柱間は約13尺、ＳＢ11との距離は2.70ｍ（約９尺）である。出土遺物はない。



第42図　ＳＢ11、ＳＡ５模式図

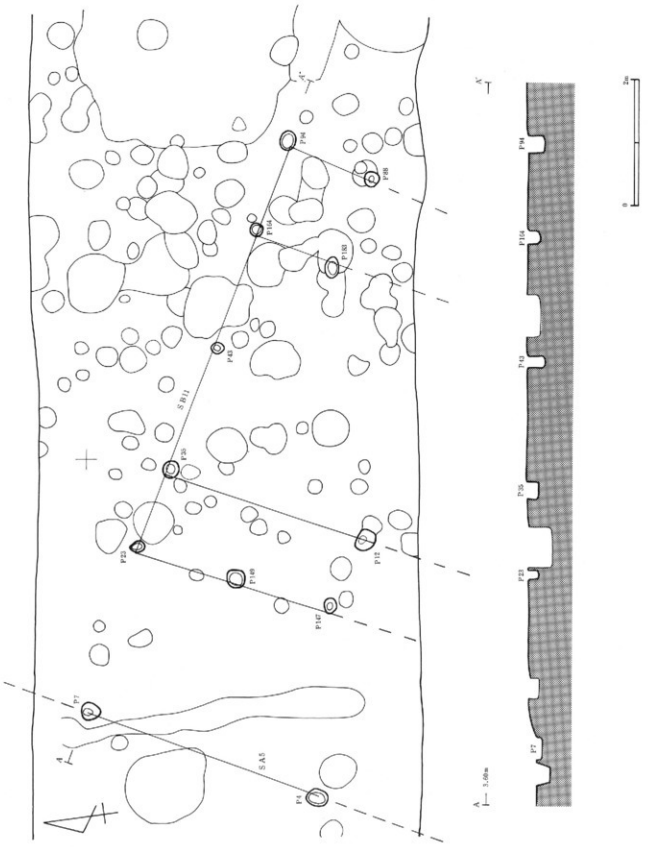
SB11

ピット No.	堀り方 cm 上端径	下端径	深さ	上質	柱痕跡	備考
147	19～23	8～10	30	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土微量	―	
149	28	20	26	同上	―	
23	23～26	10～16	11	10YR3/2 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト少量、木炭粒微量	―	
12	28	15	20	10YR3/1 黒褐色シルト、木炭粒微量	――	P－13と重複、新旧関係不明 土師器片２点
33	26	14～17	14	10YR3/1 黒褐色シルト、木炭粒少量	――	
43	18～21	10～12	27	10YR3/2 黒褐色シルト にぶい黄褐色粘土微量、木炭粒少量	……	砥石１点
183	24～34	16～24	13	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土	……	ＳＢ13・P75、P76に切られる
164	22	16	18	同上	……	
88	24	8～10	19	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト、木炭粒微量	……	ＳＢ９・P165を切る
94	24～30	18～24	26	10YR3/2 黒褐色シルト、木炭粒微量	……	

SA5

ピット No.	堀り方 cm 上端径	下端径	深さ	土質	柱痕跡	備考
4	26～34	18～28	10	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土、木炭粒微量	……	
7	27～32	13～17	14	10YR3/2 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト少量、木炭粒微量	―	

表15　ＳＢ11、ＳＡ５柱穴一覧表



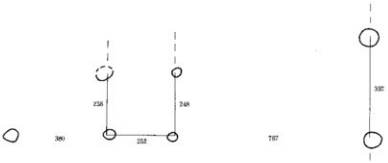
第43図　ＳＢ11、ＳＡ５平面・断面図

(11) ＳＢ12・ＳＡ６・Ｐ25（第44～46図、表16）

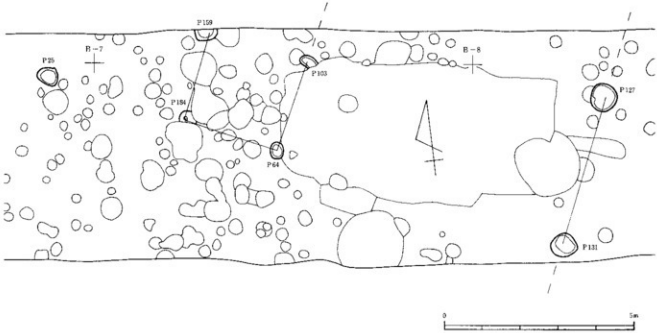
ＳＢ12　東西１間、南北１間以上の南北棟と推定される。ただし、建物の西に位置するＰ25が南側妻の柱筋の延長線上にあるので、このＰ25も建物に含まれると仮定すれば、東西２間で東廂の付く建物になる。ＳＢ13、Ｐ192に切られる他、ＳＢ９とも重複関係にある。方向は西側柱列でみるとＮ－23°－Ｅである。規模は桁行総長2.48ｍ以上、梁行総長は2.52ｍである。柱穴は表16の通りで、柱痕跡は確認できなかった。柱間は南北が約８尺、東西が約8.5尺、Ｐ25との間隔は約12.5尺である。遺物は土師器片が数点出土したのみで、時期が限定できるものはない。

ＳＡ６　ＳＢ12の東側に位置する一本柱列である。柱穴を２個しか検出していないが、南側のＰ131はＳＢ12の南側妻の柱筋の延長線上にある。柱列の方位はＮ－23°－Ｅで、ＳＢ12と同じである。柱穴は表16の通りで、柱痕跡は確認できなかった。柱間は約13尺、ＳＢ12との距離は7.87ｍ（26尺）である。出土遺物はない。

第44図　ＳＢ12平面・断面図



第45図　ＳＢ12、ＳＡ６模式図



第46図　ＳＢ12、ＳＡ６平面図

ＳＢ12

ピットNo.	上端径	下端径	深さ	掘り方 土質	柱痕跡	備考
184	42	10	33	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土	―	ＳＢ13－Ｐ78、Ｐ192に切られる
159	58	42	38	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土 にぶい黄褐色砂質シルト・木炭粒少量	―	ＳＢ13－Ｐ159と重複、新旧関係不明
64	36～46	28～34	31	10YR3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量	―	土師器片２点
103	34～50	22～38	24	10YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト微量、木炭粒微量	―	ＳＢ９－Ｐ102と重複、新旧関係不明

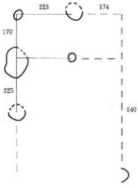
ＳＡ６

ピットNo.	上端径	下端径	深さ	掘り方 土質	柱痕跡	備考
131	62～72	48～52	31	10YR3/2 黒褐色シルト、暗褐色砂質シルト少量	―	
127	74	64	26	10YR3/2 黒褐色シルト、灰黄褐色砂質シルト少量	―	Ｐ128と重複、新旧関係不明

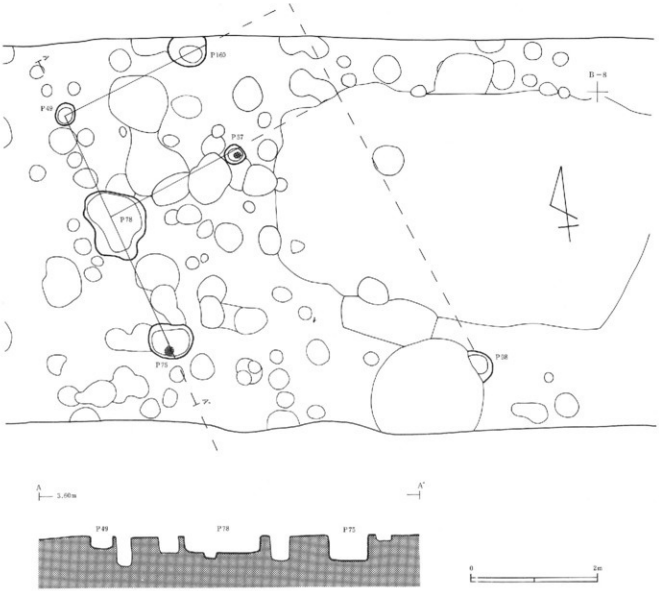
表16　ＳＢ12、ＳＡ６柱穴一覧表

(12) ＳＢ13（第47・48図、表17）

東西２間、南北３間以上の南北棟で、北側に廂が付く。ＳＢ11・12、Ｐ162・186を切っている。方向は西側柱列でみるとＮ－20°－Ｗである。規模は桁行総長6.40ｍ以上、梁行総長は3.97ｍである。柱穴は表17に示したが、確認できた柱痕跡は２箇所、径は12～15㎝である。柱間は、身舎の東西が約６～7.5尺、南北が約7.5～８尺、廂の出は5.5尺である。遺物は土師器片が少量出土したのみで、時期が限定できるものはない。



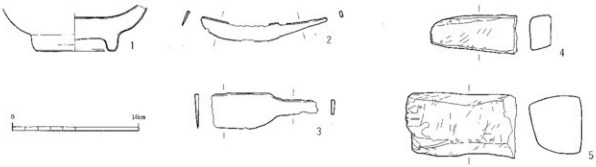
第47図　ＳＢ13模式図



第48図　ＳＢ13平面・断面図

ピット No.	掘り方 (cm) 上端径	下端径	深さ	柱痕跡 (cm) 土質	柱痕跡 (cm) 径	柱痕跡 (cm) 土質	備考
49	32～36	24～26	12	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト、木炭粒微量		―	
160	58	27～35	54	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト質粘土 にぶい黄褐色砂質シルト・木炭粒少量		―	
78	98	20	31	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト 灰黄褐色砂質シルト少量、焼土粒・木炭粒微量		―	ＳＢ12－Ｐ184、Ｐ186を切る 土師器片12点
57	32～34	20～26	29	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルト・木炭粒微量	12	10ＹＲ3/2 黒褐色粘土質シルト	Ｐ162を切る
75	54～70	40～59	29	10ＹＲ3/1 黒褐色シルト 灰黄褐色砂質シルト少量、焼土粒・木炭粒微量	15	10ＹＲ3/2 黒褐色シルト 焼土粒・木炭粒少量	ＳＢ11－Ｐ183を切る
98	54	34	33	同上		―	

表17　ＳＢ13柱穴一覧表



No.	写真図版	出土地点・遺構	種別	器種	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調	特徴
1	39－1	ＳＢ６	Ｐ122	細沼(骨嶺)	鋼	下平1/2	?	(6.2)	?	(舶)オリーブ灰	電泉無系、14区紀

No.	写真図版	出土地点・遺構	種別	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
2	39－2	ＳＢ８	Ｐ37	鉄製品、刀子	ほぼ完形	10.0	0.3～1.3	0.2	8.9	
3	39－3	ＳＡ６	Ｐ127	鉄製品、刀子	両端欠損	(8.4)	1.1～2.8	0.3	20.1	
4	39－4	ＳＡ１	Ｐ79	石製品、砥石	端部欠損	(6.8)	(3.1)	1.7	63.0	
5	39－5	ＳＢ11	Ｐ43	石製品、砥石	端部欠損	(8.8)	5.0	3.5～4.1	336.7	

第49図　掘立柱建物跡・一本柱列跡出土遺物

第４節　Ｖａ層の遺構と遺物

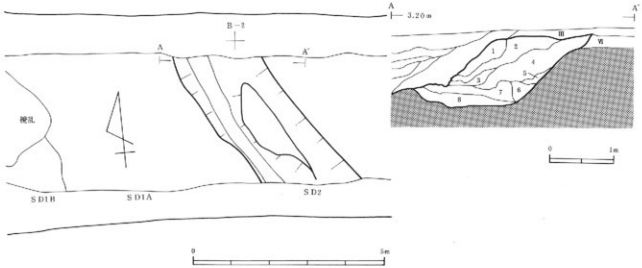
１．遺構の概要

Ｖａ層は調査区Ｂ－６グリットより東側に分布している。Ｖａ層上面から溝跡を２条確認した。なお、調査区西部に位置するＳＤ２はＶａ層ではなくⅥ層上面で確認した溝跡であるが、遺構の切り合いと堆積土の状況からＶａ層に関わる遺構と推測される。遺構の時期は古代と考えられる。

２．溝跡

ＳＤ２（第50図）

調査区西端部、Ａ・Ｂ－１・２グリットにかけて検出された。ＳＤ１Ａと同遺構と考え調査したが、断面観察の結果違う遺構であることが判明した。ＳＤ１Ａと重複関係にあり、切られていることから本遺構が古い。方向は、Ｎ－28°－Ｗである。上端幅は約200cm以上、下端幅は30～50cm、深さ80～120cm、底面は、やや凹凸があるが比較的平坦である。東壁部に底面から７cmのところに最大幅約80cmの平坦部が検出された。断面形は、ＳＤ１に切られているが、逆台形である。堆積土は８層からなり、３層下部に灰白色火山灰のブロックを多量含んでいる。いずれも自然堆積層である。底面のレベルは調査区内ではほとんど高低差はないが、下層は細砂と粘土の互層になっていることから水路の可能性が高く、周辺の地形から考えて北西から南東へ流れていたと推測される。



層位	色　　調	性　　質	備　　考
1	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄を斑状に多量含む。
2	10YR3/1　黒褐色	粘土	酸化鉄を斑状に少量含む。
3	10YR4/1　褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に少量含む。下部に灰白色火山灰をブロック状に多量含む。10YR3/1黒褐色粘土をブロック状に微量含む。
4	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を斑状に少量含む。10YR4/2灰黄褐色砂質シルトをブロック状に少量含む。
5	10YR4/3　にぶい黄褐色	細砂	酸化鉄を斑状に多量含む。10YR4/1褐灰色粘土をブロック状に微量含む。
6	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を斑状に少量含む。10YR4/1褐灰色粘土をブロック状に少量含む。
7	10YR4/1　褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に多量含む。10YR8/2灰黄褐色砂質シルトをブロック状に少量含む。
8	5Y4/1　灰色	シルト質細砂	酸化鉄を斑状に少量含む。5Y3/1オリーブ黒粘土をブロック状に多量含み、部分的に互層になっている。

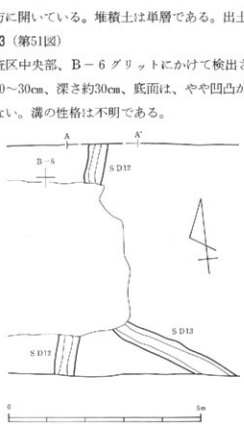
第50図　ＳＤ２平面・断面図

ＳＤ12（第51図）

調査区中央部、Ａ・Ｂ－６グリットにかけて検出された。方向は、Ｎ－14°－Ｗである。上端幅は50cm前後、下端幅は20cm前後、深さ約36cm、底面は、やや凹凸があるが平坦である。断面形は「Ｖ」字を呈し、幅の狭い底面から外方に開いている。堆積土は単層である。出土遺物はない。溝の性格は不明である。

ＳＤ13（第51図）

調査区中央部、Ｂ－６グリットにかけて検出された。方向は、Ｎ－58°－Ｗである。上端幅は約50cm前後、下端幅は20～30cm、深さ約30cm、底面は、やや凹凸があるが平坦である。堆積土は基本層Ⅳ層が堆積している。出土遺物はない。溝の性格は不明である。



層位	色　　調	性　　質	備　　考
1	10YR3/1　黒褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に少量含む。

第51図　ＳＤ12・13平面・断面図

第5節　Vb層の遺構と遺物

1．遺構の概要

Va・Vb層は調査区東半部に分布する黒褐色シルトであるが、当初は両層を区分していなかったため、Va層上面の精査のみを実施し、Vb層上面での精査は行わなかった。Va・Vb層除去後、Ⅵ層上面の精査で方形周溝墓のプランを確認したが、調査区北壁の断面を観察した結果、この方形周溝墓は本来はVb層上面から掘り込まれていたことが判明したためV層をa・bに細分している。

2．1号方形周溝墓（第52図）

調査区東部、A・B－6・7グリッド付近で確認した。調査区が限られているため、方台部の南東コーナーおよび周溝の南辺と東辺の一部のみの部分的な調査に留まっている。このため平面形ははっきりしないが、全体の規模は東西27m前後と推定される。

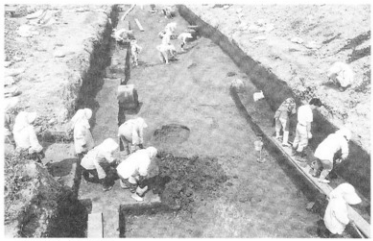
（1）方台部

全体形は不明であるが、東西は14m前後と推定される。盛土や施設などは検出できなかった。

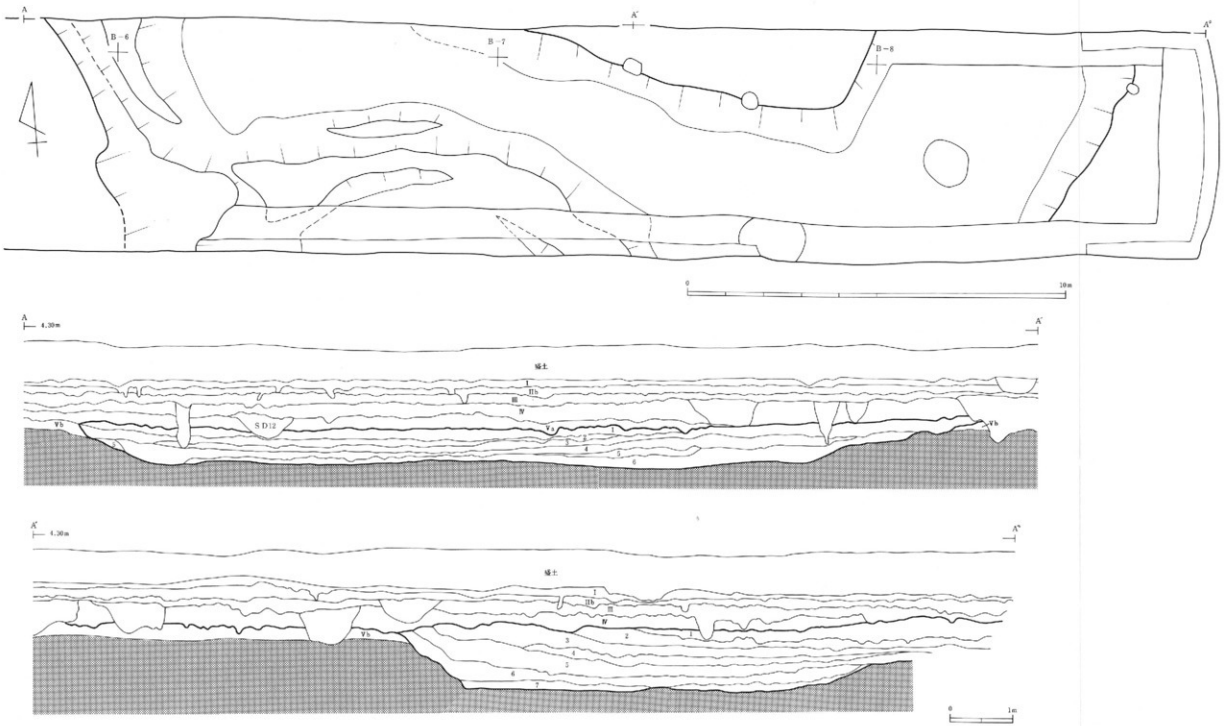
（2）周溝

東辺は上端幅約6.5m、下端幅約5mである。南辺は外側が調査区壁際のためにはっきりしないが、西側の上端から一段低いテラス状の部分が周溝内に弧状に張り出している。このため南辺は中央部が狭く、南東コーナーと南西コーナーが突出するような形態となっている。幅は中央の狭い部分で上端幅約3.5m、下端幅約1.5mである。底面はゆるやかな起伏があり、確認できた深さは東辺が約70cm、南辺が40～65cmであるが、本来の掘り込み面と考えられるVb層上面からは約75cm前後である。堆積土は黒褐色系の粘土を主としており、緩やかなレンズ状の堆積をしていることから自然堆積層と考えられる。なお周溝南辺が狭くなる部分の南側（方形周溝墓の外側）も約60cm程の深さで窪んでおり、別の遺構の一部である可能性がある。

調査風景（方台部、南から）



調査風景（東から）



A－A'

層位	土色	土性	備考
1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
2	10YR3/1　黒褐色	粘土	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に微量含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	
4	10YR2/2　黒褐色	粘土	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に微量含む。
5	10YR3/1　黒褐色	粘土	
6	10YR3/3　暗褐色	粘土	砂粒を少量含む。

A'－A"

層位	土色	土性	備考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR2/2黒褐色粘土質シルトをブロック状に少量含む。 木炭粒少量含む。
2	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR4/2灰黄褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色粘土　} をブロック状に少量含む。
3	10YR3/1　黒褐色	粘土	10YR4/2灰黄褐色シルトをブロック状に微量含む。
4	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	10YR4/1褐灰色粘土をブロック状に少量含む。
5	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	砂粒少量含む。
6	10YR4/1　褐灰色	粘土	10YR2/1黒色粘土をブロック状に微量含む。
7	7.5Y3/1　オリーブ黒	砂質シルト	10YR4/1灰色堆砂をブロック状に少量含む。

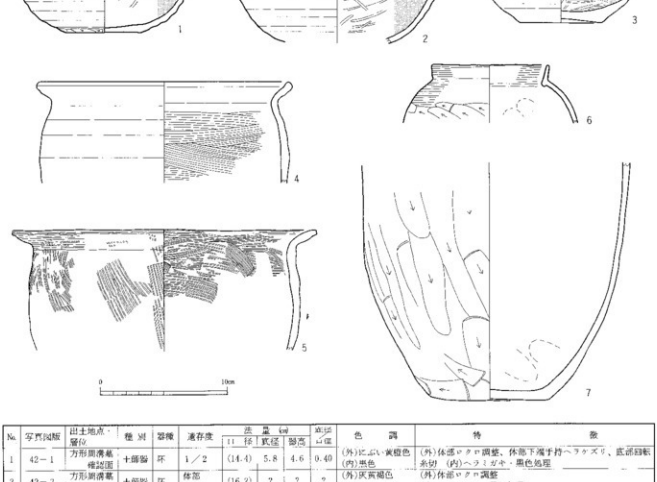
第52図　1号方形周溝墓平面・断面図

（3）出土遺物

遺物は方形周溝墓の確認面～最上層にかけて、土師器（主としてロクロ調整）・須恵器・赤焼土器・中世陶器等の破片が約1500点、堆積土の下層を中心に非ロクロ調整の土師器片が約1300点出土した。

遺構に伴わない遺物

方形周溝墓の確認面～最上層にかけて出土した遺物は、前述したようにロクロ調整の土師器が主であり、方形周溝墓の埋没過程の最終段階頃に付近から流入したと考えられる。これらのうち、図化できたのは土師器7点（第53図、写真42）である。1～3はロクロ調整の坏であるが、1は底部が回転糸切り無調整で体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施されるもの、3は底部が回転糸切り無調整で他の部分にも特に調整が加えられないものである。6は広口の壺で、外面の体部上半から口縁部内面がヨコナデ、外面体部下半がヘラケズリ調整されている。4はロクロ調整の甕、5・7は非ロクロ調整の甕で、6は内外面共にハケ目、7はヘラケズリ調整がなされている。



No.	写真図版	出土地点・層位	種別	器種	遺存度	法量 cm 口径	底径	器高	底部	色調	特徴
1	42－1	方形周溝墓確認面	土師器	坏	1／2	(14.4)	5.8	4.6	0.40	(外)にぶい黄橙色 (内)黒色	(外)体部ロクロ調整、体部下端手持ヘラケズリ、底部回転糸切　(内)ヘラミガキ・黒色処理
2	42－3	方形周溝墓確認面	土師器	坏	体部1／4	(16.2)	?	?	?	(外)灰黄褐色 (内)黒色	(外)体部ロクロ調整 (内)ヘラミガキ・黒色処理
3	42－2	方形周溝墓確認面	土師器	坏	体部下半	?	6.4	?	?	(外)にぶい橙色 (内)黒色	(外)体部ロクロ調整・底部回転糸切 (内)ヘラミガキ・黒色処理
4	42－6	方形周溝墓確認面	土師器	甕	上半部1／6	(20.0)	?	?	-	にぶい黄橙色	(外)ロクロ調整 (内)口縁部ロクロ調整、体部ナデ
5	42－5	方形周溝墓確認面	土師器	甕	口縁部2／5	(23.8)	?	?	-	(外)にぶい橙色 (内)灰黄褐色	(外)ハケ目 (内)口縁～体部上半…ハケ目、体部下半…ハケ目後ナデ
6	42－4	方形周溝墓確認面	土師器	壺	体部上半2／3	9.2	?	?	-	にぶい赤褐色	(外)体部下半～口縁ヨコナデ　体部中位～下半ヘラケズリ (内)口縁部ヨコナデ、体部ナデ
7	42－7	方形周溝墓確認面	土師器	甕	体部下半	?	9.1	?	-	にぶい黄橙色	(外)ヘラケズリ (内)ナデ

第53図　1号方形周溝墓出土遺物（1）

遺構に伴う遺物

堆積土下層から出土した非ロクロ調整の土師器片の中には堆積土上層出土の破片と接合するものもあり、確実に遺構に伴う出土状況を示してはいない。ただし、これらはすべて古墳時代前期の土器の特徴を示しており、確認面および最上層から出土した土器群とは年代的に隔たりがある。また、両者の中間の時期の遺物が全く認められないことなどから、これらは比較的限定された時期の土器群で、遺構に伴う可能性が高いと考えられる。図化できたのは土師器12点（第54図、写真40・41）である。

1はミニチュア土器で、外面は赤彩が施されている。

2・3は高杯で部分的な遺存であるが、脚上部が円柱状で中・下部が円錐台状を呈するタイプと推定される。外面は2がハケ目の後ナデ調整され、赤彩されている。3は外面が磨滅しているため調整方法や赤彩の有無は不明である。

4の壺は頸部下半のみの遺存である。内・外面共にハケ目調整で、外面には赤彩が施されている。

5は複合口縁の壺の口縁部で、口唇部を欠いているが、比較的直線的に開くものである。内・外面共にハケ目調整で、内面は磨滅のためはっきりしないが、外面には赤彩が施されている。

6は焼成前底部穿孔の複合口縁壺で、口縁部・頸部・体部上半・体部下半の各部位にそれぞれ復元できたもの（写真41、2－1～2－4）を図上復元したものである。口唇部を欠いているため口径と器高が不明であり、また図上復元のため各部の計測値は厳密なものではないが、復元した現存高31.3㎝、体部高21.5㎝、体部最大径24.4㎝、底部の穿孔部径8.0㎝である。底部（穿孔部の周辺）の器厚は特に厚くなく、そのまま体部に移行する。体部はほぼ球形を呈しており、最大径は中央部にある。頸部はやや開き気味で、口縁部は大きく外反する。口唇部を欠いているためはっきりしないが、口径は体部最大径をやや上回る程度と推定される。胎土は比較的緻密で細砂粒を微量含んでいる他、白色針状物質も僅かに認められる。調整は外面が細かいハケ目であるが、体部下半のみはハケ目の後ナデ調整されてハケ目が消されている。内面は口縁部と頸部が外面同様に細かいハケ目、体部はナデである。なお、外面の口縁部から体部上半にかけてとロ縁部内面には赤彩が施されている。また、積み上げ痕は体部上半の内面に明瞭に観察され、幅は1～3.5㎝程度である。

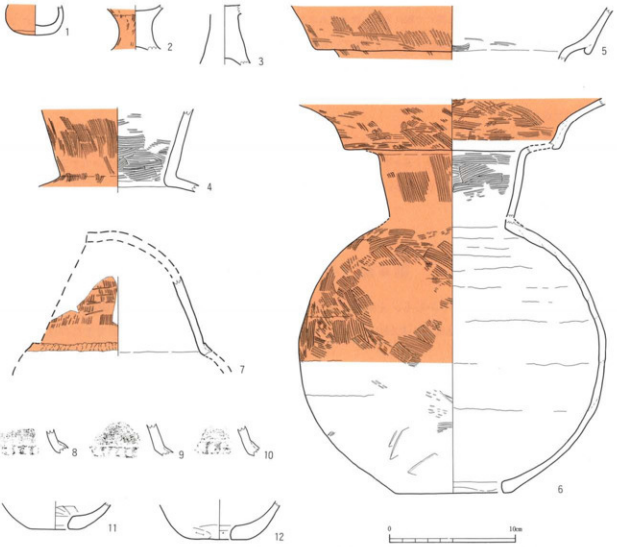
7～10は同一個体である。体部（？）がわずかに外側に屈曲している。屈曲部の外面には粘土紐が貼り付けられ、表面には指頭あるいは棒状の工具のようなもので押しつけられた連続する浅い圧痕が認められる。外面は細かなハケ目調整の後、一部に横方向のナデが施され、赤彩されている。内面はナデ調整である。胎土は緻密で細砂粒を微量含んでいる他、白色針状物質もわずかに認められる。小片のために上下の位置関係がはっきりしないが、内面がナデ調整のみでしかも赤彩が内面にまでは及ばない点を重視し、この部分の内面が外から見えない部位に当たるのではないかと考えた結果、7のように上方が閉じるように内側に傾く器形を想定した。器種については、図のような形態であれば「手焙形土器」のようなものが考えられ(註1)、図とは上下が逆で上方に向かって開く形であれば、有段口縁の壺の頸部から口縁部下端のような部位であるか、あるいは鉢のような器形が想定される。形態や調整技法からは壺の可能性は低いと思われるが(註2)、現段階ではあらゆる可能性を考慮して器種は不明としておきたい。

11・12は小片で、外面が磨滅しているが、甕と考えられる。

（註）

1．これらの破片については「手焙形土器」である可能性が考えられたため、「手焙形土器の研究（1）」（高橋：1996）を著している高橋一夫氏をはじめ坂野和信氏、福田聖氏に実見していただいた。その結果、現段階における結論としては「器種は断定できないが、手焙形土器ではない可能性が高い」との御教示をいただいている。

その理由としては



No.	写真図版	出土地点・層位	種別	器種	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調	特徴
1	40－1	方形周溝墓 堆積土	土師器	ミニチュア	口縁部欠損	?	3.4	?	にぶい黄橙色 橙色(赤彩部分)	ナデ、体部外面赤彩
2	40－2	方形周溝墓 堆積土	土師器	高坏	脚部上半	?	?	?	(外)にぶい赤褐色 (内)灰黄褐色	(外)ハケ目後ナデ (内)ナデ？(磨滅)
3	40－3	方形周溝墓 堆積土	土師器	高坏	脚部上半	?	?	?	(外)橙色 (内)にぶい黄橙色	(外)？(磨滅) (内)ナデ？(磨滅)
4	40－4	方形周溝墓 堆積土	土師器	壺	頸部 2／5	?	?	?	(外)にぶい赤褐色(赤彩) (内)灰黄褐色	(外)ハケ目 (内)頸部～ハケ目、体部～ナデ
5	41－1	方形周溝墓 堆積土	土師器	壺	口縁部下半 1／4	?	?	?	(外)橙色(赤彩) (内)にぶい橙色(赤彩？)	(外)ハケ目 (内)ハケ目後ナデ
6	41－2	方形周溝墓 堆積土	土師器	壺	1／3	?	9.2	?	(外)口縁～体部上半～赤(赤彩)、体部下半～にぶい橙色 (内)口縁～赤(赤彩)、頸部～体部～にぶい黄橙色	(外)口縁～体部上半～ハケ目、体部下半～ハケ目後ナデ (内)口縁～頸部～ハケ目、体部～ナデ
7	41－3	方形周溝墓 堆積土	土師器	不明	部分	?	?	?	(外)にぶい橙色(赤彩) (内)にぶい黄橙色	(外)ハケ目後一部ナデ (内)ナデ
8	——	方形周溝墓 堆積土	土師器	不明	小片	?	?	?	(外)にぶい橙色(赤彩) (内)にぶい黄橙色	№7と同一個体
9	——	方形周溝墓 堆積土	土師器	不明	小片	?	?	?	(外)にぶい橙色(赤彩) (内)にぶい黄橙色	№7と同一個体
10	——	方形周溝墓 堆積土	土師器	不明	小片	?	?	?	(外)にぶい橙色(赤彩) (内)にぶい黄橙色	№7と同一個体
11	40－5	方形周溝墓 堆積土	土師器	甕	底部のみ	?	4.0	?	にぶい黄橙色	(外)？(磨滅) (内)ヘラナデ
12	40－6	方形周溝墓 堆積土	土師器	甕	底部 1／2	?	(4.6)	?	にぶい黄橙色	(外)？(磨滅)、一部ヘラケズリ (内)ナデ

第54図　１号方形周溝墓出土遺物（２）

①現在確認されている手焙形土器とは器形が異なっている。

②通常、土器は製作時の粘土紐の接合部で割れる場合が多い。手焙形土器は鉢部の口縁部で覆い部と接合されているので、割れる場合も鉢部と覆い部の境界（くびれ部）で割れるのが普通であるのに対し、これらの土器は帯状の貼り付け部のすぐ下で割れている。したがって手焙形土器とは異なる製作技法でつくられていると推定される。

③これらの土器は赤彩されているが、手焙形土器で赤彩される例は極めて少ない。

④ハケ目の方向は普通は上方から下方に向かうが、手焙形土器とした場合は方向が逆になってしまう。

以上のような点である。

2．有段口縁の壺の口縁部と頸部との接合部にこのような粘土紐の貼り付けがなされる類例はない。また古墳時代前期の壺の口縁部や頸部の内面には、外面と同じようなヘラミガキやハケ目調整が施される例が多い。また、口縁部の内外面にヨコナデが施される場合も、頸部内面にはハケ目調整が行われる例が多い。

第6節　その他の出土遺物

各遺構以外の基本層Ⅰ～Ⅳ層中からも、土師器、須恵器、赤焼土器、土師質土器、陶器、磁器、瓦質土器、瓦、石製品、鉄製品、銅製品、木製品などが約580点ほど出土している（表18）。これらのうち図示できたのは15点（第55図）である。

1．Ⅰ層中出土遺物

陶器、金属製品、石製品など7点が図化できた。1は瀬戸産の瓶子の脚と推定され、外面には浅黄～にぶい黄褐色の釉がかかる。2は山茶碗窯系の鉢である。3は瀬戸あるいは美濃の鉄釉の天目茶碗で、14～16世紀に比定される。4は中国産の黒釉の天目茶碗で、12～13世紀に比定される。5は砥石、6は鉄釘、7は銅銭である。

2．Ⅱ層中出土遺物

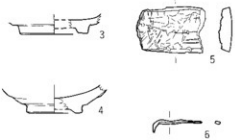
第2節で述べたように、Ⅱ層は調査の際に削りすぎたためⅢ層中からの出土遺物は少ない。図化できたのは9の石臼（下臼）1点のみである。

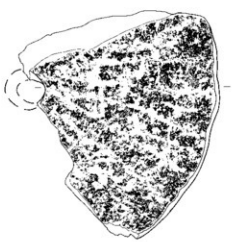
3．Ⅳ層中出土遺物

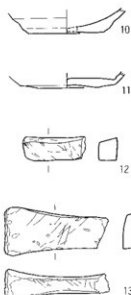
土師質土器、磁器、石製品、銅製品など6点が図化できた。10はロクロ調整の土師質土器小皿で、底部は回転糸切りされている。11は青磁と推定される皿で、内面には櫛描文が描かれている。12・13は砥石、14は銅銭である。15の勾玉は調査区東部のA－8グリッド北壁を削っている際に出土したもので、この地区の下層で検出された方形周溝墓と関連がある可能性が高い。

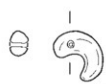
4．出土層不明の遺物

8の銅銭は調査区の壁面を削っている際に出土したもので、出土層位は不明である。









No.	写真図版	出土地点・層位	種別	器種	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調	特徴
1	44－1	C　2　I層	陶器	瓶子	脚部1/8	?	(15.4)	?	(釉)浅黄色～にぶい黄褐色	瀬戸、15世紀
2	44－2	東部　I層	陶器	鉢	口縁小片	?	?	?	灰白色	山茶碗窯系
3	44－3	B－6　I層	陶器	天目茶碗	底部1/3	?	(5.2)	?	(釉)黒褐色(器面)灰黄色	瀬戸か美濃、鉄釉、14～16世紀
4	44－4	東部　I層	陶器	天目茶碗	底部1/3	?	(4.4)	?	(釉)黒色(器面)灰色	中国、黒釉、12～13世紀

No.	写真図版	出土地点・層位	種別	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
5	44－5	東部　I層	石製品、砥石	端部欠損	(3.2)	3.6	1.1	27.8	
6	44－6	東部　I層	鉄製品、釘	先端部欠損	(3.8)	0.2	0.4	1.8	
7	44－7	東部　I層	銅製品、銅銭	完形	—	—	—	—	永楽通宝
8	44－8	A－7　?(攪)	銅製品、銅銭	3／4	—	—	—	—	?開通宝
9	45－1	B－7　II層	石製品、石臼	1／4	直径(29.2)		9.3	3,120	下臼

No.	写真図版	出土地点・層位	種別	器種	遺存度	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調	特徴
10	45－2	B・6－7　IV層	土師質土器	小皿	下半1/3	?	(6.0)	?	灰褐色	(内・外)ロクロ、底部回転糸切
11	45－3	A・B－7　IV層	磁器(青磁?)	皿	底部1/4	?	(4.8)	?	灰オリーブ	中国、陰線文

No.	写真図版	出土地点・層位	種別	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
12	45－4	A・B 7　IV層	石製品、砥石	端部欠損	(4.9)	1.9	1.5	28.9	
13	45－5	B－6 － 7　IV層	石製品、砥石	端部欠損	(8.2)	2.5～3.8	1.3～2.7	79.5	
14	45－6	B－8　IV層	銅製品、銅銭	完形	—	—	—	—	治平元宝
15	45－7	東部　IV層	石製品、勾玉	完形	2.2	0.8	0.7	2.7	

第55図　その他の出土遺物

第3章　考察

第1節　遺物について

今回の調査では各遺構および基本層から土師器、須恵器、赤焼土器、土師質土器、陶器、磁器、瓦質土器、瓦、石製品、鉄製品、銅製品、木製品、種子等の自然遺物など各種の遺物が3861点出土している（表18）。しかし復元できた個体数が少ないため、分類をして検討を加えることができない。したがってここでは種別ごとにまとめて前章で触れられなかった点を中心に述べることとする。

1．中・近世の遺物

（1）土師質土器

皿・小皿が15点出土している。ロクロ調整と手づくねのものがあるが、大部分がロクロ調整で手づくねのものは1点のみである。

ロクロ調整のものは3点図化できた（第8図1、第16図2、第55図10）。全体形が判るものはないが全て薄手のものである。

手づくねのものはＳＤ1から皿が1点（第8図5）のみ出土している。丸底風平底で、口唇部が三角形を呈する厚手のもので、口縁部がヨコナデ、体部外面はヘラケズリされている。

土師質土器皿（かわらけ）については、まだ県内の編年が確立されてはいないが、南小泉遺跡において編年試案が示されており、それによれば手づくねの大皿（口径12～13㎝）は12世紀後半～末頃に位置づけられている。なお福島県においては県内を細かく地域区分した編年作業が進んでいる。各地域によってかなり差があるためそのまま仙台平野に引用することはできないが、手づくねのやや大型の皿に限ってみれば、これらは変遷の初期の段階に認められるようであり、南小泉遺跡とほぼ同様の状況であると言えよう。当遺跡のものは共伴遺物が不明なため時期を限定することは出来ないが、12世紀後半～13世紀頃のものと考えておきたい。なお、ロクロ調整の皿については年代を限定することはできない。

（2）陶器

全部で58点出土しており、中世が34点、近世が2点、近・現代のもの22点である。

中世の無釉陶器としては在地産および常滑産の甕類がやや多く、渥美産の壺、山茶碗窯系（第55図2）や東海地方産と推定される鉢類が少量加わる。これらの大部分は体部資料のため図示できず、詳細な年代は不明である。なおこの他には瀬戸産（第11図1）・瀬戸あるいは美濃産（第55図3）・中国産（第55図4）の大口茶碗、瀬戸産の瓶子の脚（第55図1）と推定されるものなどがある。点数は少ないが、年代的にはほぼ中世全般にわたって認められ、天目茶碗や瓶子などの存在から武士階級に係わる屋敷等があったことが窺える。

一方、近世の陶器は非常に少なく、大堀相馬1点、ＳＤ1から出土した岸窯系の丸皿（片口）1点（第8図2）のみである。これは近世の遺構が少ないせいもあるが、前章で述べたように、基本層皿層をやや掘りすぎたことも影響していると考えられる。岸窯系の丸皿（片口）としたものは口縁部をややつまみ出すような形態となっており、岸窯産のもののように体部から続くラインをそのまま丸く収めるものとはやや異なっている。しかしながら、釉の色調、焼成、底部の切離し法などに共通する点が多いことから、岸窯産とは断定できないものの、同じ技術系譜に連なる窯の製品と推定される[註1]。

（3）磁器

全部で12点出土しており、中世が7点、近世が2点、近現代が3点である。

層・遺構		土師器 坏	土師器 高坏	土師器 ミニチュア	土師器 手捏形?	土師器 壺	土師器 甕	土師器 釜・甑類	赤焼土器 坏	須恵器 坏	須恵器 甕	須恵器 瓶	須恵器 不明	土師質土器	陶器 在地	陶器 相馬	陶器 岸窯系	陶器 東海	陶器 山茶碗系	陶器 常滑	陶器 渥美	陶器 瀬戸	陶器 瀬戸か美濃	陶器 中国	陶器 不明	磁器 肥前	磁器 中国	磁器 不明	瓦質土器	瓦	石製品 硯石	石製品 石臼	石製品 茶臼	石製品 勾玉	鉄製品 釘	鉄製品 刀子	銅製品 銅銭	木製品 漆器椀	木製品 用途不明	自然遺物 馬の歯	自然遺物 桃核	自然遺物 種子	粘土塊	計
基Ⅰ・Ⅱ		41					148			7	6			4	3	1		1	1	3		1	1	1	12	1		2	2	2	1				2		1							241
基Ⅲ														1						1												1								1				4
基Ⅳ		51						258	1	1	4			1	1			1		7	1						1				1			1			1							330
SD1	上層						1			1				4				1		3					1	1	1														3	8		24
SD2	下層	12					1										1			2					8		1	1			1							2				29		58
SD5	上層						3	1																																		2		6
SD5	下層																					1																						1
SD6・A	上層													2	1																													3
SD6・B	下層	1					2													1					1		1						1			2						53		62
SD7							4																																					4
SD10	下層	1					1		2																																			4
SK1							63																																					63
SE1							1																													1								2
SE2	上層	1					3													1							1												1					7
SE2	下層	2																																										2
SB1		1					10																																					11
SB2		3					1																																					4
SB4							4																																					4
SB5							1																																					1
SB6		3					5																				1																	9
SB7							4																																					4
SB8							10																																					10
SB9							17																																					17
SB10		1					7																												1									9
SB11							3																								1													4
SB12		1					2				1																																	4
SB13		2					13																				1																	16
SA1		1																													1													2
SA2		3					1																																					4
SA4							1																																					1
SA6		7					3							3																						1								14
その他ピット		15					29				1																																	45
方形周溝墓	確認面	391	1					1092	5	21	30	2	2							1	1															1	1						1	1549
方形周溝墓	上層		3	2				395			1																																	401
方形周溝墓	下層				4	10		848																																				862
層不明		5	4					64			4																								1		1							79
計		542	8	2	4	10	338	2658	8	30	47	2	2	15	5	1	1	3	1	19	2	2	1	1	22	2	7	3	2	2	5	1	1	1	4	5	4	2	1	1	3	92	1	3861
		3562							8	81				15	58											12			2	2	8				9		4	3		96			1	

表18 破片集計表

中世のものは全て中国産である。このうちＳＥ２出土の皿１点のみが染付（第18図２）である他はほとんどが龍泉窯系の青磁である。青磁のうち図化できたのはＳＤ１から出土した碗２点（第８図３・６）、ＳＤ６の碗１点（第16図１）、ＳＢ６の碗１点（第49図１）で、この他に基本層Ⅳ層から出土した青磁と推定される櫛描文の皿（第55図11）がある。染付皿が16世紀後半、他の青磁碗は13～14世紀に比定される。

近世のものはＳＤ１出土の１点（第８図４）が図化できた。肥前産の染付皿である。

（４）瓦質土器

基本層Ⅰ・Ⅱ層から小片が２点出土したのみである。

（５）瓦

基本層Ⅰ・Ⅱ層から桟瓦片が２点出土したのみである。

（６）石製品

砥石５点、粉挽き臼（下臼）１点、茶臼（下臼）１点が出土している。なお、砥石のうち基本層出土の２点とＳＤ１Ａ・ＳＤ２出土の１点は古代の遺物である可能性もある。

（７）金属製品

鉄製品として釘４点、刀子５点、銅製品として銭４点がある。なお、鉄製品のうち基本層出土の釘２点は古代の遺物である可能性もある。

（８）木製品

ＳＤ１Ａ・ＳＤ２から遺存状況は悪いが漆器椀２点が出土している（第８図８・９）。１点は内面に赤漆が塗られており、もう１点は高くて厚い高台が付くものである。年代は限定できないが、前者がおおよそ15世紀以降、後者は高台がやや外反する特徴から16世紀後半以降に比定（註２）されよう。なお、この他にＳＥ２から用途不明の棒状のものが出土している。

（９）自然遺物

馬の歯、種別不明の焼骨小片の他、ＳＤ１Ａ・２・５からはクルミの種子、ＳＤ６からはクルミとモモの種子が出土している。

２．古墳～平安時代の遺物

（１）土師器

破片が3562点出土したが、図示できたのは方形周溝墓の確認面から出土した７個体（第53図）と堆積土中から出土した13個体（第54図）のみである。

確認面から出土した土器には、ロクロ調整の坏・甕、非ロクロ調整の壺・甕がある。以下に器種ごとの特徴について触れておく。

坏　３点ある（第53図１～３）。器形はすべて体部が内湾する底形を呈し、底部が遺存する１と３は共に切離し技法は回転糸切りで、１は体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。全体形が判る１の底径／口径比は0.40である。これらの特徴を持つ土器は、家老内遺跡第２号住居（真山：1981）、宮前遺跡第ⅣＢ群（丹羽：1983）、清水遺跡ⅧＢ・ⅧＣ群（丹羽他：1981）、安久東遺跡第２号住居（土岐山：1980）、中田南遺跡ⅣＢ群土器（太田：1994）、多賀城跡第60次調査ＳＫ2113（真山他：1991）、同第61次調査第７・10・11層出土土器（真山他：1991）など多くの遺跡で認められ、多賀城Ｄ群・Ｅ群土器（白鳥：1980）に相当する。ほぼ９世紀後半～10世紀中葉にかけて存続するタイプであるが（註３）、厳密な共伴関係が不明なため詳細な年代を特定することはできない。

甕　甕は３点で（第53図４・５・７）、ロクロ調整のもの、ハケ目調整のもの、ヘラケズリ調整のものがある。年代は限定できないが、ヘラケズリ調整のものは体部上半がロクロ調整である可能性があることや、ハケ目調整の甕も中田南遺跡のように９世紀代まで残る例があること、さらに坏はすべてロクロ調整であることなどから甕もほぼ

平安時代の所産である可能性が高い。

壺　広口の短頸壺で（第53図6）、口縁部内外面と外面の体部上部がヨコナデ、外面体部下半がヘラケズリされている。土師器には類例がなく、須恵器を模倣した可能性がある。

以上のように、方形周溝墓確認面から出土した土師器は概ね平安時代前半頃のものと考えられる。

次に、方形周溝墓堆積土の下層を中心に出土した土器（第54図）について述べる。

図示した土器群は、7～10の器種不明（手焙形？）土器を除いて塩釜式（氏家：1957）の範疇に含まれるものである。塩釜式土器については丹羽茂氏（丹羽：1985）、次山淳氏（次山：1992）、辻秀人氏（辻：1994，1995）などによって編年案が示されている。それぞれの編年によって時期区分の設定に差があるが、総体的に見て各期における土器のセット関係や各器種の変遷過程は同じであると考えられるので、これらの編年案に沿いながら高杯・壺・甕について、それぞれの特徴をまとめながら編年的位置についてみてみたい。なお、7～10の土器については後述する。

高杯　2点あるが、脚部上半部のみの遺存である。脚部の長さが不明確であるが、脚上部が柱状中実で下半部が大きく開くタイプと推定され、中実の部分が短い2は安久東遺跡方形周溝墓出土のもの（土岐山：1980）に類似し、中実の部分がやや長い3は清水遺跡第Ⅳ層出土のもの（丹羽：1981）に類似している。

高杯については各タイプの変遷が確実に捉えられているわけではない。ただ、2・3のように脚上部が柱状中実で脚下半部が大きく開くタイプは、脚部全体が柱状中実で長いものの祖形と考えられており、丹羽編年ではⅡA段階、次山編年では第2～3段階、辻編年ではⅢ－2期とされている。

壺　3点ある。複合口縁のものが2点であるが、あとの1点も複合口縁である可能性がある。全体形が判るのは1点（第53図6）で、焼成前に底部穿孔されたものである。口唇部を欠いているが、口径が体部径をやや上回る程度でほぼ同じと推定されることや、口縁部の段が明瞭なこと、体部が球形を呈することなどの特徴が安久東遺跡方形周溝墓出土の壺に類似している。ただし若干異なる点としては、安久東遺跡の壺のほうが体部がやや偏平で体部最大径が中央よりもやや下にあり、なかにはやや下膨れの感じを与えるものもあること、さらに安久東遺跡の壺のほうが底部がやや突出していることなどがあげられる。

複合（二段）口縁で底部が穿孔される壺は一般集落からはあまり出土しないため細かな変遷が明らかではなく、底部の形態と時期差との関係は不明であるが、体部の形態に注目すれば古いものは体部が球形に近く、新しい段階になるとやや長胴化していく傾向がある。この点からすると当遺跡の壺は安久東遺跡方形周溝墓出土の壺よりもやや後出的で、今熊野遺跡第1号方形周溝墓（丹羽：1985）の壺よりは先行する要素を持っているといえる。したがって、時期的には安久東とほぼ同じと考えられるが、先に述べたように体部の形態からするとこれよりもやや下る可能性もある。安久東遺跡の壺は丹羽編年ではⅡA段階、辻編年ではⅡ－2期とされており、今熊野遺跡第1号方形周溝墓の壺は丹羽編年ではⅡA段階でもⅡB段階に近い時期、辻編年ではⅢ－3期とされていることからすると当遺跡出土の壺は丹羽編年ではⅡA段階、辻編年ではⅡ－2期～Ⅲ－1期にあたり、次山編年では第2段階に相当する。

甕　単孔式の底部小片が2点ある[注4]（第54図11・12）。2点ともに全体形は不明であるが底部が丸底風で突出しない形態は大橋遺跡第Ⅱ層（太田：1980）、宮前遺跡第38号住居（丹羽：1983）などに類例がある。

甕は古い段階の資料が少ないが、新しい段階になると底部が突出する傾向があることが指摘されており（辻：1995）、11・12のような形態は辻編年Ⅱ－1～Ⅲ－2期の段階にかけて認められる。

以上のように、高杯・底部穿孔壺・甕について個別にその編年的位置を検討してみた。高杯と底部穿孔壺は塩釜式土器の変遷におけるほぼ中間の段階にあたると考えられ、甕は前半～中間段階と考えられる。出土状況からは厳

密に共伴関係にあるとはいえないが、これらの土器は丹羽編年ではⅡA段階の器種構成として捉えられる。なお資料点数が少ないことと、底部穿孔壺については他の器種とは異なった特殊な土器であることなどの制約があるため断定は避けておきたいが、丹羽編年ではⅡA段階でも前半に近い時期、辻編年ではⅡ－2～Ⅲ－1期、次山編年では第2段階に相当する可能性を考えておきたい。

器種不明土器

第54図7～10の土器については、前章において器種・器形の問題と「手焙形土器」であるか否かの問題について述べたが、ここでは「手焙形土器」と仮定した場合の年代的な問題について触れておきたい。

先に述べたように確実な共伴関係とは言えないが、7～10の土器と一緒に出土している高坏と壺は辻編年のⅡ－2～Ⅲ－1期に相当することから7～10の土器もほぼ同時期と考えられる。そして辻編年の1期は庄内式の新しい段階、同Ⅱ期は布留式の古い段階に併行するとされていることから、当遺跡の方形周溝墓下層の出土土器群は布留式の古段階に併行すると推定される。

高橋一夫氏は手焙形土器を「銅鐸の消滅と前後して出現し、定型化した前方後円墳が出現する頃には消滅する」（高橋：1996、P－311）特別な祭祀具と推定している。高橋氏によれば、弥生時代後期中葉に畿内に出現し、その後九州北部から関東地方北部にまで波及する。東国においては庄内式併行期が出現期とされ、同期の後半に盛行し、布留式併行期になると急速に消滅し、退化形態であるD類が少量認められる程度になる。

手焙形土器の下限については土器の持つ機能が具体的に解明されなければ限定はできないが、布留式併行期にもわずかながらも認められることから、布留式の古段階に併行すると推定される7～10の土器が手焙形土器であったとしても年代的には矛盾はない。また、高橋氏は手焙形土器が特別な祭祀具と仮定して「定型化した前方後円墳が出現する頃には消滅する」としているが、仙台平野で最古の定型化した前方後円墳として確認されているのは辻編年のⅢ－4期とされている遠見塚古墳であるので、古墳の年代観と手焙形土器の衰退・消滅時期との関係とも合致する。

以上のように、仮に手焙形土器であるとしても年代的には矛盾はなく、推測を逞しくすれば、東北地方南部への波及は東国よりも遅れ、全国的には手焙形土器の衰退期にあたる布留式併行期に至って東北地方南部に分布域が広がってきた可能性が考えられる。

（2）石製品

勾玉が1点ある（第55図15）。前述したように方形周溝墓との関連が予想される。

（註）

1．調査者の鈴木功氏に実見していただいき、御教示を受けた。

2．『中田南遺跡』（太田：1994）によると、内面に赤彩が塗られるものは15世紀、高台が高くて厚いものは16世紀以降に認められるようになる。さらに高台が高くて外面がやや外反するものは新しい要素とされている。

3．県内のロクロ土師器坏は、体部が直線的で、底部と体部下端に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリなどの再調整が施されるものが初現形態であり、そこから体部が内湾して再調整が施されないものへ変遷していくことが明らかにされている。

体部が直線的なタイプを主体とする土器群の年代については、現段階では多賀城跡第60次調査ＳＥ2101Ｂ Ⅲ層出土の木簡の年代からほぼ9世紀前葉に確定されており（真山他：1991）、これより後出するタイプである体部が内湾するものは9世紀前葉までは遡らないことが明らかにされている。またこのことは多賀城跡第61次調査（真山他：1991）でも層位的に確認されている他、小川淳一氏によっても指摘されている（小川：1987）。

4．辻氏はこの器種を有孔鉢に分類している。

第2節　遺構について

1．遺構の年代

前章で述べたように、今回の調査においては必ずしも層位的な精査ができたわけではないが、平面で確認できた切り合い関係や調査区壁面の断面観察などによって遺構の新旧関係および掘り込み面を明らかにすることができた。

これらの層序関係と遺物の年代観から各層ごとの遺構の年代についてまとめると以下のようになる。

（1）Ⅱb層上面の遺構

Ⅱb層上面の遺構はSD3とSD4がある。年代を特定できる遺物が皆無であるが、後述するⅢ層との対比から18～19世紀頃と推定される。

（2）Ⅲ層上面の遺構

Ⅲ層上面の遺構はSD1A・SD1B・SD5・SD7・SD8・SK1がある。このうち年代がある程度限定できる遺物とそれらが出土している遺構には次のようなものがある。

SD1A・1B	土師質土器皿		12世紀後半～13世紀	（第8図5）
	龍泉窯系	青磁碗	13世紀	（第8図3・6）
	岸窯系	丸皿（片口）	17世紀中葉～末	（第8図2）
	肥前	染付皿	18世紀？	（第8図4）
SD5	瀬戸	天目茶碗	14世紀～	（第11図1）

SD1A・1Bの遺物は12～13世紀のものと17～18世紀のものに分けられる。SD1Aは調査時にSD1B・SD2と同時に掘り込んでいるため遺物が区別できないが、SD1AがSD1Bを切っていることから岸窯系の丸皿や肥前の染付皿などの新しい遺物はSD1Aに帰属すると考えられる。なお、土師質土器皿と青磁碗は年代がかけ離れていることからⅢ層上面の遺構とは関連がない可能性が高く、周辺のⅣ層上面の遺構から混入したと推定される。[第1]

一方、SD5の出土遺物もSD1Aの推定年代とは開きがあることから、これらも周辺のⅣ層上面の遺構から混入したと推定される。

以上のように、Ⅲ層上面の遺構のうち年代が確定できるものは少ないが、SD1Aの年代から考えて、Ⅲ層上面の遺構の年代は大体17～18世紀頃と推定されよう。なお、重複関係から先に述べたSD1B→SD1Aの変遷とSK1→SD5→SD7の変遷は判明しているが、遺構間の詳細な併行関係は不明である。

（3）Ⅳ層上面の遺構

Ⅳ層上面の遺構にはSD6A・SD6B・SD9～SD11・SE1・SE2・SA1～6・SB1～13がある。このうち年代がある程度限定できる遺物とそれらが出土している遺構には次のようなものがある。

SD6A・6B	龍泉窯系	青磁碗	12世紀後半～	（第16図1）
SE2	中国	染付皿	16世紀後半	（第18図2）
SB6－P122	龍泉窯系	青磁碗	14世紀	（第49図1）

遺物の点数は少ないが、ほぼ中世全般にわたる。また、この他に前述したSD1・SD5の他、基本層1層中からも12～16世紀頃の遺物が多く認められることから、Ⅳ層上面の遺構は大体12世紀後半～16世紀にかけてのものと推定される。なお、Ⅳ層中から出土した遺物のうち最も新しい遺物は初鋳年が西暦1064年とされる治平元宝であることから、Ⅳ層の形成時期の下限はそのころと考えられ、このこともⅣ層上面から掘り込まれた遺構の年代と矛盾しない。

（4）Va層上面の遺構

Va層上面の遺構はSD2・SD12・SD13である。年代を確定できる遺物がないが、SD2の堆積土中に灰白

色火山灰ブロックを含むことから、ＳＤ２は10世紀前半以前に掘られたことがわかる。また、直下のＶｂ層上面の遺構である方形周溝墓の確認面（周溝堆積土最上層）から平安時代の土器群が出土していることからＶａ層の形成は平安時代以前にまでは遡らないことが明らかである。これらのことからＶａ層上面の溝跡の年代は平安時代に収まると考えられる。

（５）Ｖｂ層上面の遺構

Ｖｂ層上面の遺構は１号方形周溝墓のみである。時期は前節で行った遺物の検討から古墳時代前期中頃と推定される。

２．遺構の特徴と変遷

各時代の遺構の特徴と変遷について、遺跡の周辺地区も含めてまとめてみたい。なお、第１次調査区も含めた遺構の分布を第56図に示したが、調査区の制約から遺構間の繋がり等については不明な点が多い。

（１）古墳時代

方形周溝墓は全体像が不明であるが、一辺27ｍ程度と推定される。隣接する戸ノ内遺跡の方形周溝墓は24.5×26ｍとほぼ同じであるが、今熊野遺跡では７～15ｍのものが多いことから27ｍという規模はやや大型であると言えよう。この地区で確認された方形周溝墓は、戸ノ内遺跡の１基、当遺跡１次調査の３基に続いて５基となり、墓域も東側に広がってきている。今後さらに墓域の拡大が予想される。

なお、この地区の方形周溝墓の年代をみると、戸ノ内遺跡の方形周溝墓は辻編年Ⅱ－１期とされ、当遺跡１次調査の３基のうち１号方形周溝墓は報文では丹羽編年の「ⅡＡ段階後半でⅡＢ段階により近い」とされているので辻編年ではⅢ－２期に相当すると考えられ、２・３号方形周溝墓は詳しい時期は不明であるが丹羽編年の第Ⅱ段階と推定されている。今回発見された方形周溝墓は前述したように辻編年ではⅡ－２～Ⅲ－１期にあたることから、時期的には戸ノ内遺跡と当遺跡１次調査１号方形周溝墓の中間を埋める形となる。

（２）平安時代

平安時代の遺構は溝３条のみであるので、この時期の状況は不明な点が多い。ただ、方形周溝墓の確認面から比較的多量の土器が出土していることから、調査区の周辺にこの時期の遺構があったことは予想される。なお、戸ノ内遺跡や１次調査でも平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が少数検出されているので、この時期には集落と言えるかどうかは別として密度は希薄ながらも遺構が広がっていることがわかる。

（３）中世

中世の遺構はＳＤ６Ａ・６Ｂ・９～11、ＳＥ１・２、ＳＡ１～６、ＳＢ１～13である。このうち、一本柱列と掘立柱建物跡については前章において柱間陥や方向から同時期に存在した組合せを推定しているが、さらにこれらは建物の特徴と方向から以下のような６群に分類できる。

Ａ群　西廂付の南北棟で、主軸は北から７°東に振れ、周囲に塀か柵が巡る。（ＳＢ１・ＳＡ１）

Ｂ群　北あるいは西廂付の南北棟で、主軸は北から15～21°東に振れる。（ＳＢ２・３・４）

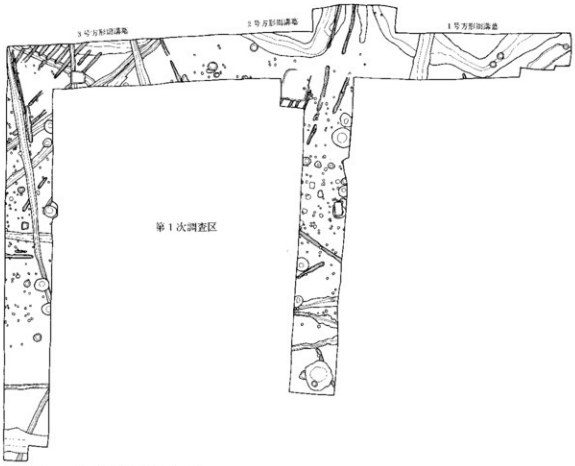
Ｃ群　廂が付かない東西棟で、主軸は北から83～85°東に振れる。（ＳＢ７・８・９）

Ｄ群　廂が付かない東西棟で、主軸は北から87°東に振れ、周囲に塀か柵が巡る。（ＳＢ５・６、ＳＡ２）

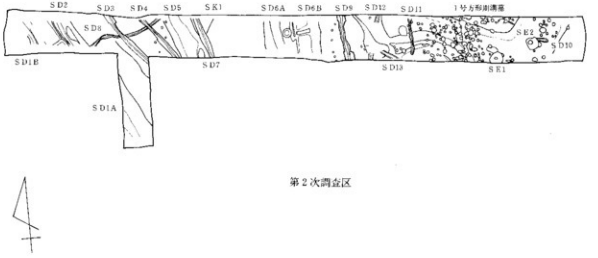
Ｅ群　東か西あるいは東西に廂の付く南北棟で、主軸は北から23～27°東に振れ、周囲に塀か柵が巡る。（ＳＢ10・ＳＡ３・４、ＳＢ11・ＳＡ５、ＳＢ12・ＳＡ６）

Ｆ群　北廂が付く南北棟で、主軸は北から20°西に振れる。（ＳＢ13）

同じ方向を向く建物が必ずしも同時期であるとは断定できないが、ほとんど同じ場所で建て替えられた建物群が類似する属性を持ついくつかのグループに分けられる場合、同じ属性を持つ建物群は近接した時期に連続して建て



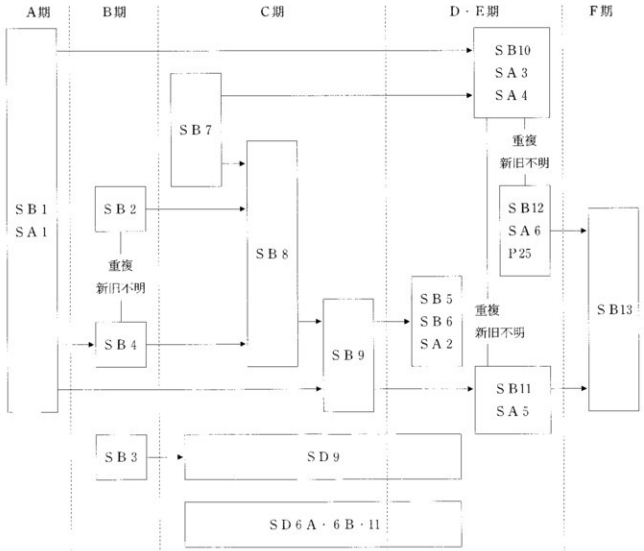
第56図　1次・2次調査遺構全体図



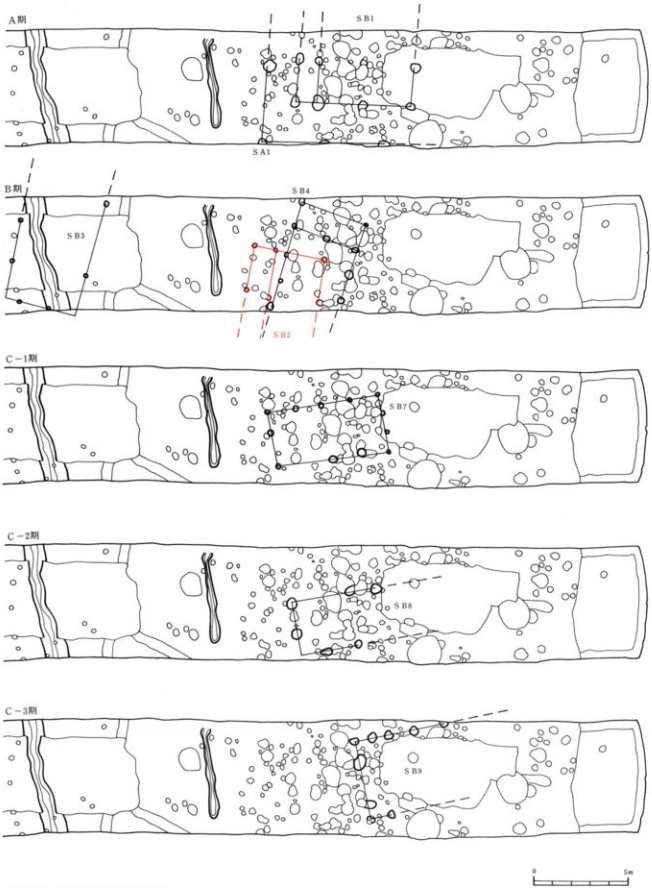
替えられている可能性が考えられる。そこで、柱穴の切り合い関係から新旧が明確になった遺構についてみてみると次のようになる。

ＳＢ１（Ａ群）→ＳＢ４（Ｂ群）・ＳＢ８（Ｃ群）
ＳＢ１（Ａ群）→ＳＢ９（Ｃ群）・ＳＢ10（Ｅ群）
ＳＢ２（Ｂ群）・ＳＢ８（Ｃ群）→ＳＢ９（Ｃ群）→ＳＢ11（Ｅ群）・ＳＢ13（Ｆ群）
ＳＢ３（Ｂ群）・ＳＤ９
ＳＢ７（Ｃ群）・ＳＢ８（Ｃ群）・ＳＢ10（Ｅ群）
ＳＢ９（Ｃ群）・ＳＢ５（Ｄ群）
ＳＢ12（Ｅ群）・ＳＢ13（Ｆ群）

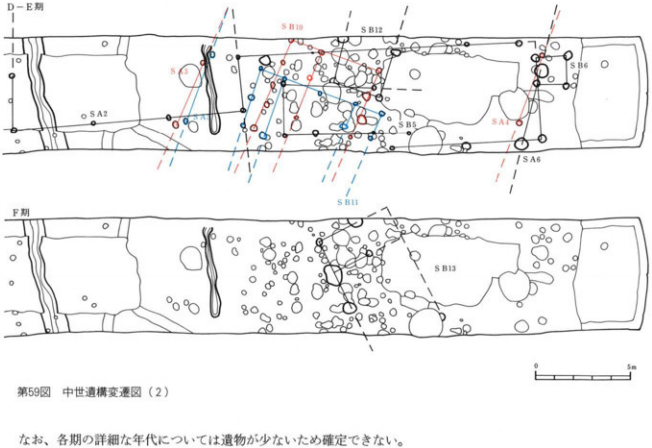
これらを総合すると、掘立柱建物跡および一本柱列は大別してＡ→Ｂ→Ｃ→Ｄ・Ｅ・Ｆの各群の順に変遷し、なおかつ各群中でも細かな変遷があることが判る。なお、Ｄ群とＥ群との新旧関係については不明であるが、Ｄ群としたＳＢ５の方向がＣ群の建物に近いことから一応Ｄ群の方がＥ群よりも古い可能性を考えておきたい。また、ＳＤ10は性格がはっきりしないが、ＳＤ６Ａ・６Ｂ、９・11の方向はＳＢ５・７～９の方向に近いことから、これらの溝跡についてはほぼＣ群およびＤ群と併行した時期のものと推定される。井戸跡については不明であるが、掘立柱建物跡と一本柱列の各群を各小期に置き換え、溝跡を加えてまとめると以下のようになる。



第57図　中世遺構の新旧関係模式図



第58図　中世遺構変遷図（１）



第59図　中世遺構変遷図（２）

なお、各期の詳細な年代については遺物が少ないため確定できない。

（４）近世

Ⅱｂ層は層の特徴から畑の耕作土と推定される。この層上面から掘り込まれた溝（ＳＤ３・ＳＤ４）の性格については断定できないが、Ⅱｂ層の性格からすると、畑に関わる区画溝などの可能性がある。年代は18～19世紀頃と推定される。

（註）

（１）調査時に同時に掘ったＳＤ２の遺物である可能性も考えられたが、ＳＤ２は堆積土中に灰白色火山灰が認められることから、10世紀前半には埋没過程にあると推定され、これらの遺物とは年代に開きがある。

第３節　まとめ

調査の結果、Ⅲ～Ⅵ層上面で掘立柱建物跡13棟、塀跡あるいは柵跡と考えられる一本柱列６列、その他柱穴と考えられるピット約50基、溝跡13条、土坑１基、井戸跡２基、方形周溝墓１基を検出したが、これらはⅡｂ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴａ層、Ⅴｂ層に関わる遺構に分けられる。各層に関わる遺構の年代はⅡｂ層が近世後半、Ⅲ層が近世前半、Ⅳ層が中世、Ⅴａ層が平安時代、Ⅴｂ層が古墳時代前期と推定される。前節と重複する部分もあるが、調査成果および問題点を整理すると以下のようになる。

１．古墳時代前期の方形周溝墓が１基検出された。方形周溝墓は隣接する戸ノ内遺跡のものが仙台平野では最古とされているが、今回のものは戸ノ内遺跡に後続する時期にあたる。なおこの地区における方形周溝墓の検出数は戸ノ内遺跡１基、当遺跡１次調査３基で、今回の１基を入れると合計５基となる。これらの検出地点を含めた全体の範囲は南北200ｍ、東西250ｍほどになるが、墓域はさらに広がる可能性がある。

なお、遺物は焼成前に底部穿孔された複合口縁壺が１点復元できた他、「手焙形土器」のような形態と推定さ

れる土器が注目される。

2．平安時代の溝跡３条が検出された他、方形周溝墓の堆積土最上層からこの時期の遺物が比較的多く出土した。当該期の遺構は戸ノ内遺跡や１次調査区でも検出されており、全容は不明ながらも平安時代の集落が東側にも広がることが確認された。

3．中世の掘立柱建物跡13棟、塀跡あるいは柵跡と考えられる一本柱列６列、その他柱穴と推定されるピット約50基、溝跡５条、井戸跡２基が検出された。戸ノ内遺跡や当遺跡１次調査同様に「四郎丸館跡」との関連が予想されるが、特にＳＤ６Ｂの底面には畝状の障壁があり、城館特有の施設として注目される。また、掘立柱建物跡と一本柱列は両者の関係がほぼ明らかとなりさらに６期の変遷が推定できた。各期の詳細な年代は確定できないが各期を総合して大体12世紀後半～16世紀と考えておきたい。ただし１次調査では13～14世紀の遺物が多く出土しており、今回の調査結果とはやや違いがある。遺構のつながりが不明であることも含めて今後の課題となろう。

4．近世の遺構は溝跡７条、土坑１基で、１次調査で検出されたような屋敷跡は発見できなかった。今回の調査区がちょうど家敷から外れた畑地に相当したためと推定される。

引用・参考文献

当田光雄　1988「堀内部障壁の一形態について　後北条氏領国下のいわゆる障子堀・畝堀を中心に」『中世城郭研究　第２号』

当田光雄　1989「堀内部障壁の一形態について　全国の類例を考える」『中世城郭研究　第３号』

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家和典　1984「宮城の古墳」『宮城の研究　第１巻　考古学篇』清文堂出版

太田昭夫　1980「大橋遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第71集　宮城県教育委員会

太田昭夫　1994『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集　仙台市教育委員会

大友　透　1993『仙台東道路遺跡発掘調査概報　Ⅲ』名取市文化財調査報告書第31集　名取市教育委員会

小川淳一他1987『五本松遺跡　都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第99集　仙台市教育委員会

岡田茂弘・桑原滋郎　1974「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要　Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所

加藤道男　1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢　Ⅱ』

加藤道男　1996「東北地方の古墳時代の土器（土師器）」『日本土器辞典』雄山閣

加納俊介　1991「土師器の編年　４東海」『古墳時代の研究　６土師器と須恵器』雄山閣

小竹森直子1990「手焙形土器雑想…葛籠尾崎遺跡出土品に寄せて－」『紀要　第３号』財団法人滋賀県文化財保護協会

小村田達也他1993『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書第159集　宮城県教育委員会

佐藤　洋　1990『南小泉遺跡　第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集　仙台市教育委員会

主浜光朗・渡部弘美　1984『戸ノ内遺跡－発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第70集　仙台市教育委員会

庄子貞雄・山田一郎　1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城市－昭和54年度発掘調査概報』　宮城県多賀城跡研究所

柴桃正隆　1973『史料仙台領内古城・館』宝文堂

白鳥良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要　Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

須田良平他1992『野田山遺跡』宮城県文化財調査報告書第145集　宮城県教育委員会

仙台市史編さん委員会1995　『仙台市史　特別編２　考古資料』仙台市

仙台叢書刊行会1893　「封内風土記」田中希文編『仙台叢書』仙台叢書出版協会

仙台叢書刊行会1923「仙臺領古城書上」『仙台叢書』４

高橋一夫　1996「手焙形土器の研究」『埼葛地域文化の研究　下津弘君・塚越哲也君追悼論文集』下津弘君・塚越哲也君追悼論文集刊行委員会

佐田幸司　1995『四郎丸館跡』仙台市文化財調査報告書第200集　仙台市教育委員会

次山　淳　1992「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班　埋蔵文化財研究会15周年記念論文集

辻　秀人　1994「東北南部における古墳出現期の土器編年－その1　会津盆地－」『東北学院論集－歴史学・地理学　第26号』東北学院大学学術研究会

辻　秀人　1995「東北南部における古墳出現期の土器編年－その2」『東北学院論集－歴史学・地理学－第27号』東北学院大学学術研究会

土岐山武　1980「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集　宮城県教育委員会

長島栄一・青沼一民　1983『中田畑中遺跡－発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第53集　仙台市教育委員会

丹羽　茂他1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集　宮城県教育委員会

丹羽　茂　1983「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群　宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集　宮城県教育委員会

丹羽　茂　1985「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第140集　宮城県教育委員会

藤沢　淳　1993「東北南部の古墳出現期の墳墓」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

福島県考古学会中近世部会　1995『かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀』福島県考古学会

福島県考古学会中近世部会　1996『かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀（2）』福島県考古学会

古川一明・白鳥良一　1991「土師器の編年　8東北」『古墳時代の研究　6土師器と須恵器』雄山閣

真山　悟　1981「家老内遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第81集　宮城県教育委員会

真山　悟他1991『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1991　宮城県多賀城跡調査研究所

米田敏幸　1991「土師器の編年　1近畿」『古墳時代の研究　6土師器と須恵器』雄山閣

渡部弘美　1995『今泉遺跡－第4次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第201集　仙台市教育委員会

写真図版

写真1　方形周溝墓完掘状況

写真2　中世の堀跡（ＳＤ６）完掘状況

写真3　ＳＤ３確認状況（南東から）

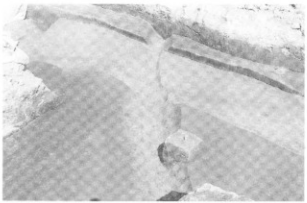


写真4　ＳＤ３完掘状況（南東から）

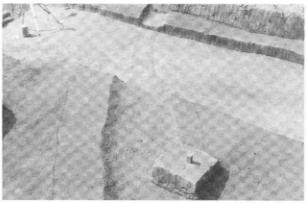


写真5　ＳＤ４確認状況（南東から）

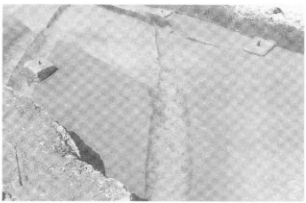


写真6　ＳＤ４完掘状況（南東から）

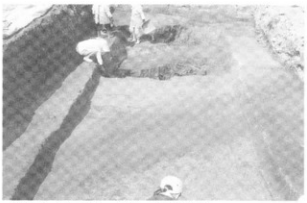


写真7　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２確認状況
（Ｂ－１・２グリッド、東から）

写真8　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２完掘状況
（Ｂ－１・２グリッド、西から）

写真9　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２完掘状況
（Ｂ－１・２グリッド、南東から）

写真10　ＳＤ１Ａ完掘状況
（Ｂ・Ｃ－２・３グリッド、北西から）

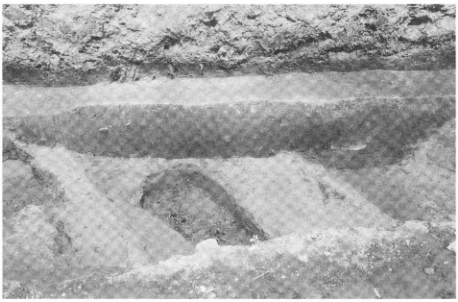


写真11
ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２断面
（南から、右側はＳＤ２）

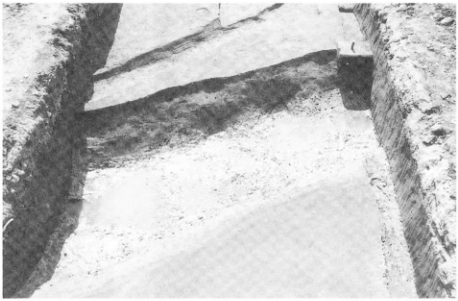


写真12
ＳＤ５完掘状況
（東から、向う側はＳＤ４）

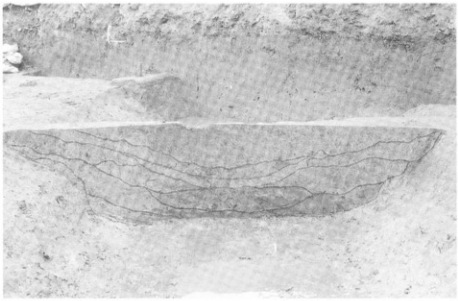


写真13
ＳＤ５断面（南から）

写真14　ＳＤ７完掘状況（南東から）

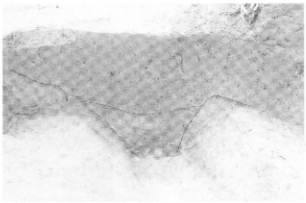


写真15　ＳＤ７断面（南から）

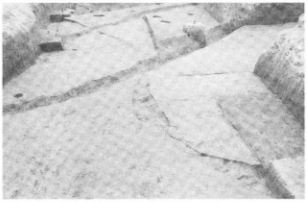


写真16　ＳＤ８完掘状況（西から）

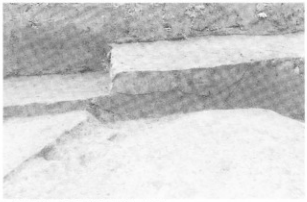


写真17　ＳＤ８断面（北から）

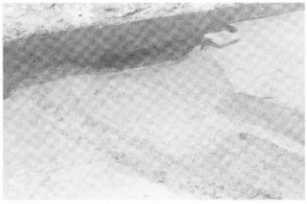


写真18　ＳＫ１完掘状況（南西から）

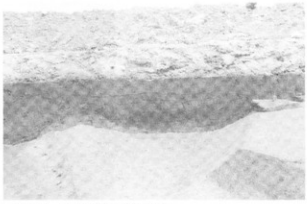


写真19　ＳＫ１断面（南から）

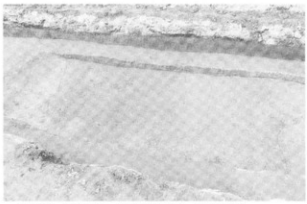


写真20　ＳＤ６Ａ・６Ｂ確認状況（南東から）

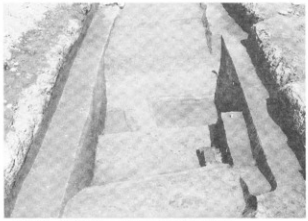


写真21　ＳＤ６Ａ・６Ｂ完掘状況（西から）

写真22　ＳＤ６Ａ・６Ｂ完掘状況（南から、左側がＳＤ６Ａ、右側がＳＤ６Ｂ）

写真23　ＳＤ６Ａ・６Ｂ断面（南から）

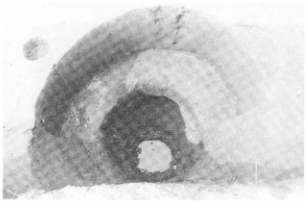


写真24　ＳＥ１完掘状況（南から）

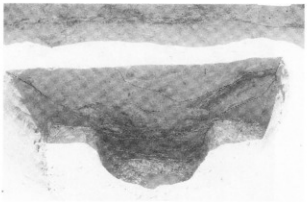


写真25　ＳＥ１断面（北から）

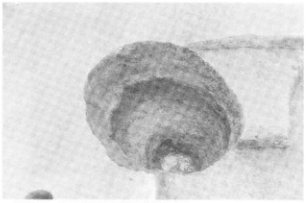


写真26　ＳＥ２完掘状況（北から）

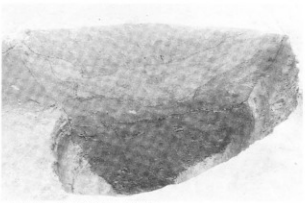


写真27　ＳＥ２断面（西から）

写真28　Ｎ層上面柱穴群全景（Ｂ－６～８グリッド、西から）

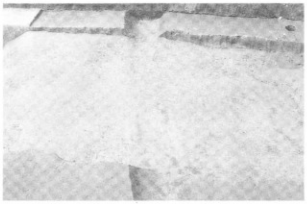


写真29　ＳＤ９完掘状況（南から）

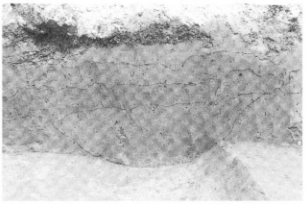


写真30　ＳＤ９断面（南から）

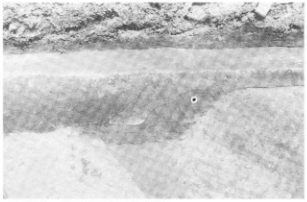


写真31　ＳＤ２断面（南から）

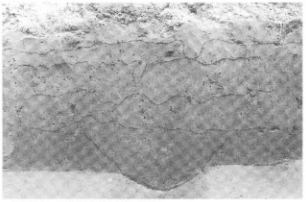


写真32　ＳＤ12断面（南から）

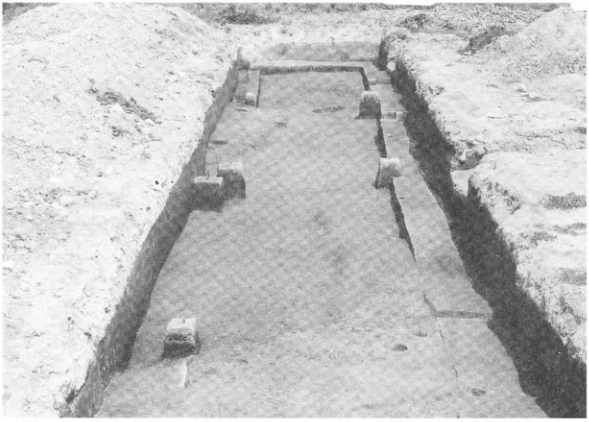


写真33　１号方形周溝墓完掘状況（西から）

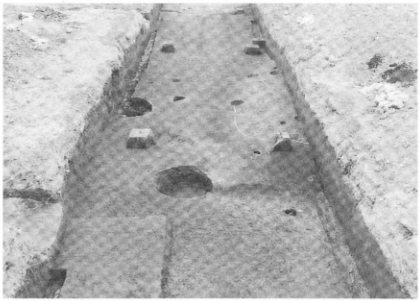


写真34
1号方形周溝墓確認状況（東から）

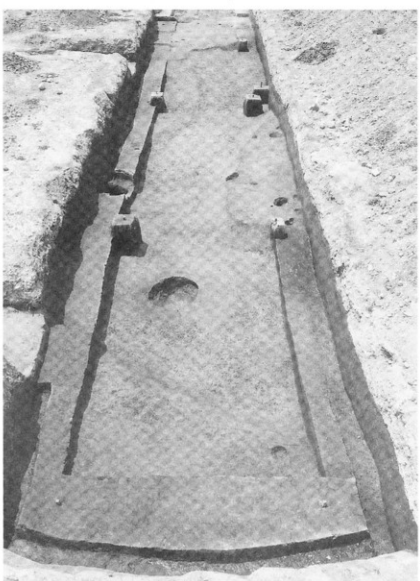


写真35
1号方形周溝墓完掘状況（東から）

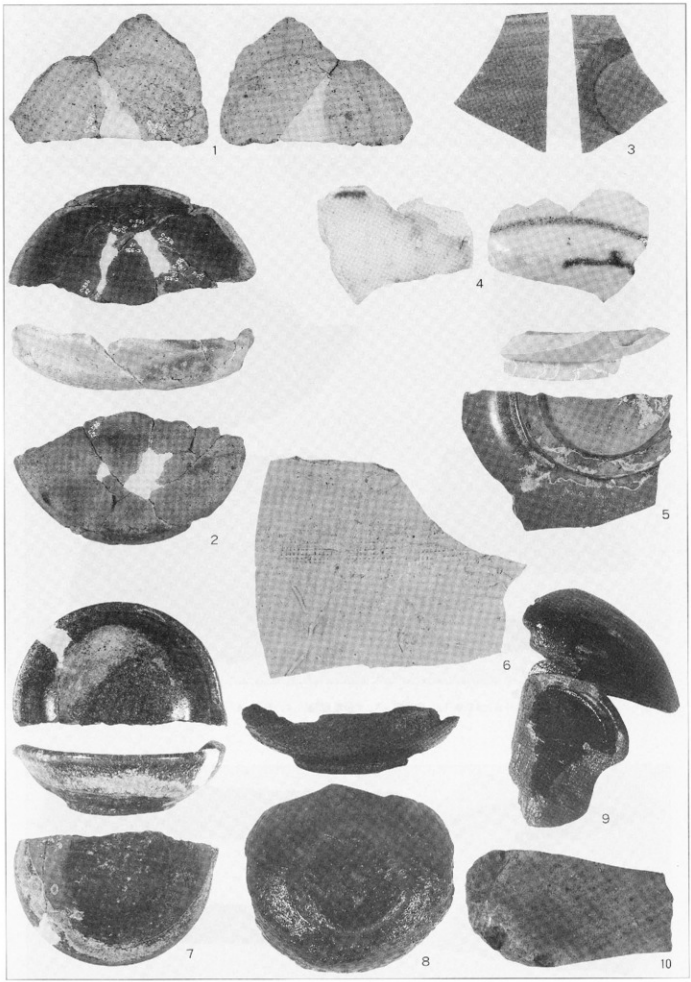


写真36　ＳＤ１Ａ・１Ｂ・２出土遺物
（1．土師質土器小皿、2．同皿、3．磁器椀、4．同皿、5．同碗？、6．陶器壺
7．同皿、8・9．須器椀、10．砥石）

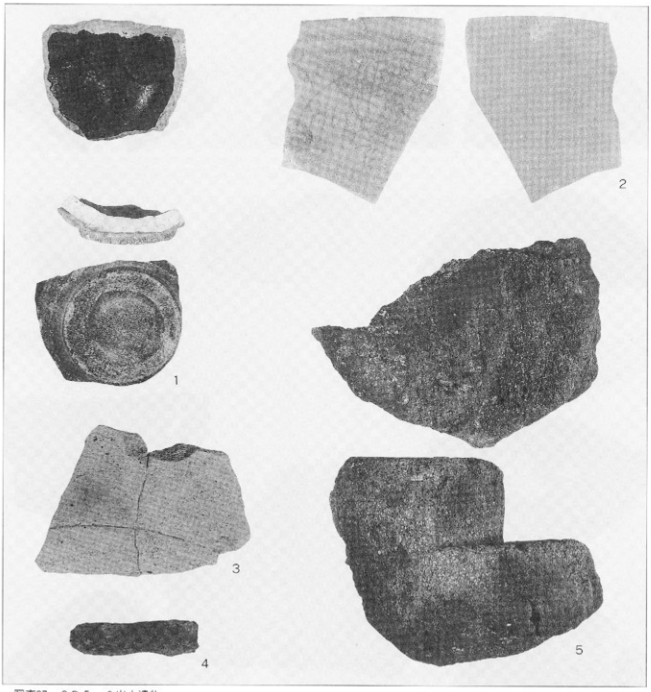


写真37　ＳＤ５・６出土遺物
1．ＳＤ５陶器碗、２～５．ＳＤ６（２．磁器碗、３．土師質土器皿、４．刀子、５．茶臼）

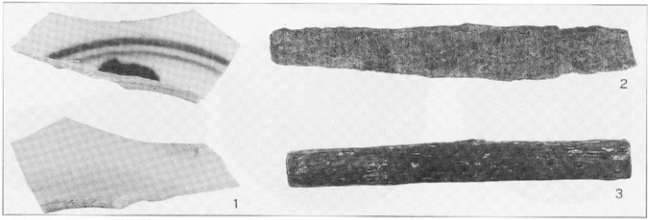


写真38　ＳＥ１・２出土遺物
1．ＳＥ２磁器皿、２．ＳＥ１刀子、３．ＳＥ２棒状木製品

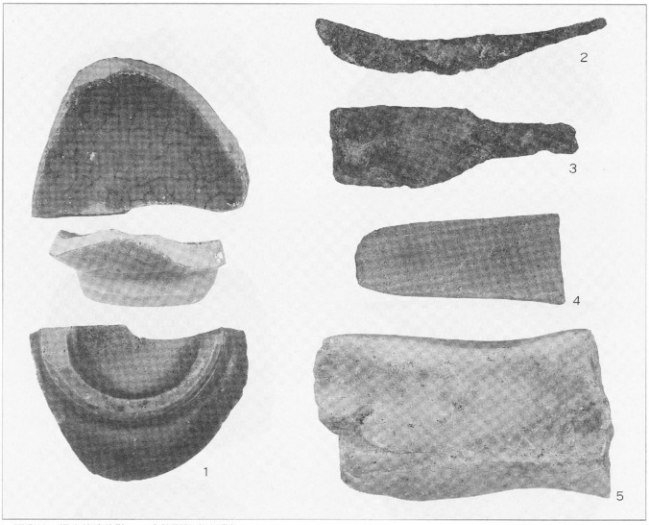


写真39　掘立柱建物跡・一本柱列跡出土遺物
1．SB6器器蓋、2．SB8刀子、3．SA6刀子、4．SA1砥石、5．SB11砥石

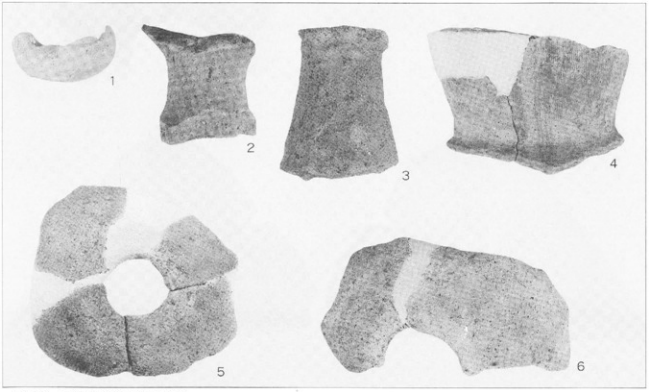


写真40　方形周溝墓出土遺物（1）
1．ミニチュア土器、2・3．高坏、4．壺、5・6．甕

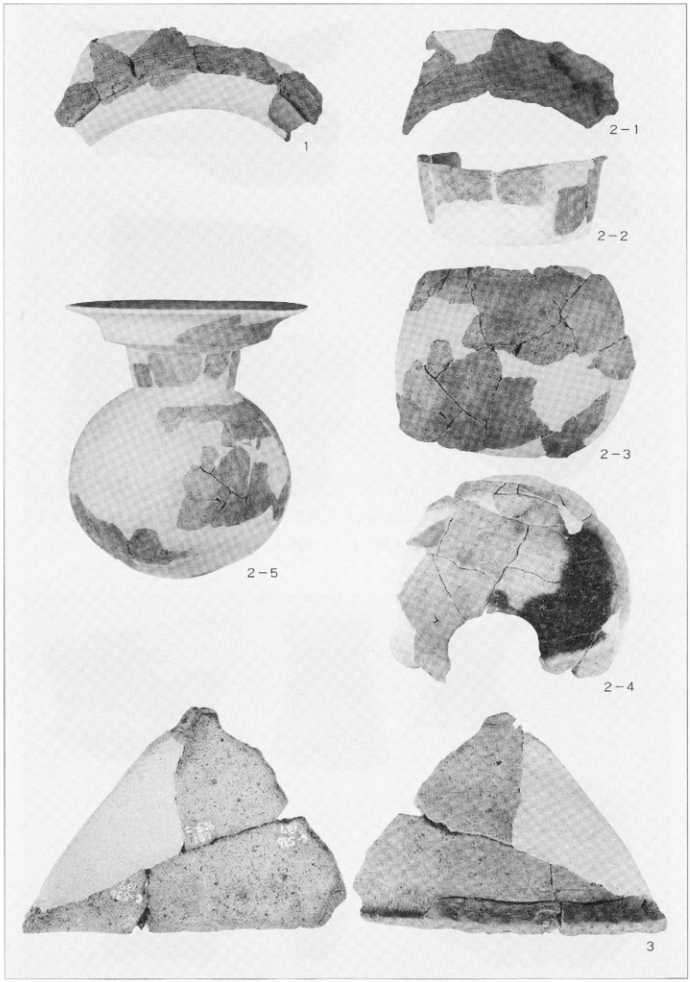


写真41　方形周溝墓出土遺物（2）　1・2．壺、3．手焙形土器？

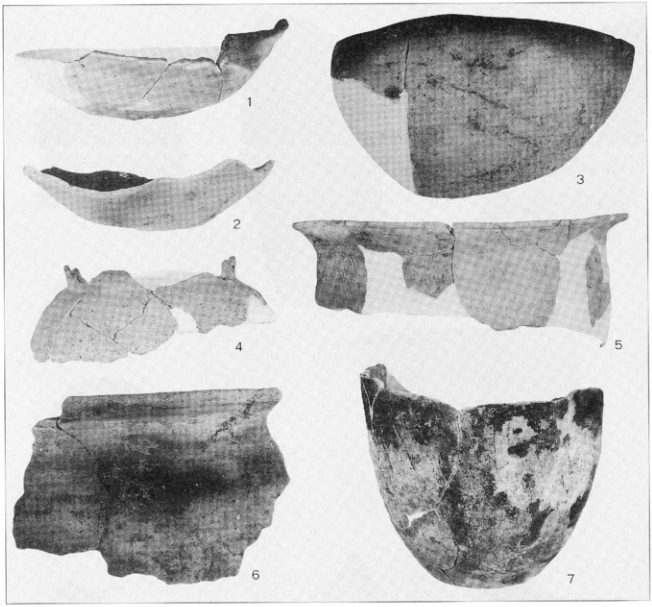


写真42　方形周溝墓出土遺物（3）　1～3．坏、4．壺、5～7．甕

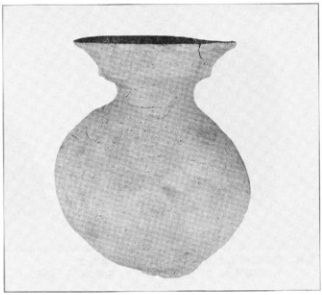


写真43
第1次調査1号方形周溝墓出土の壺

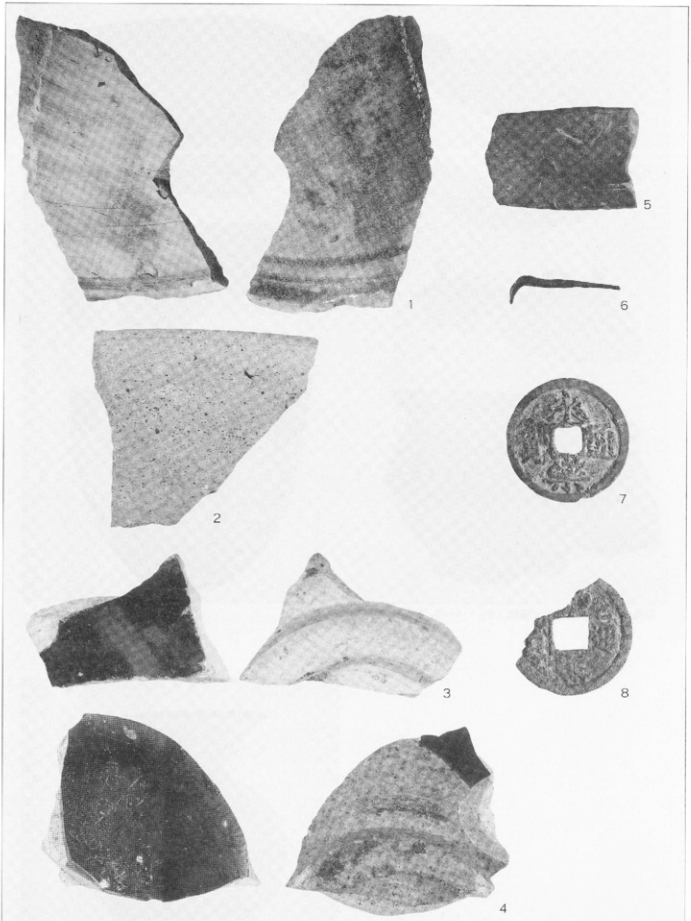


写真44　その他の出土遺物（1）　— I 層出土 —
1．陶器敷子、2．陶器鉢、3・4．陶器碗、5．紙石、6．釘、7・8．銅銭

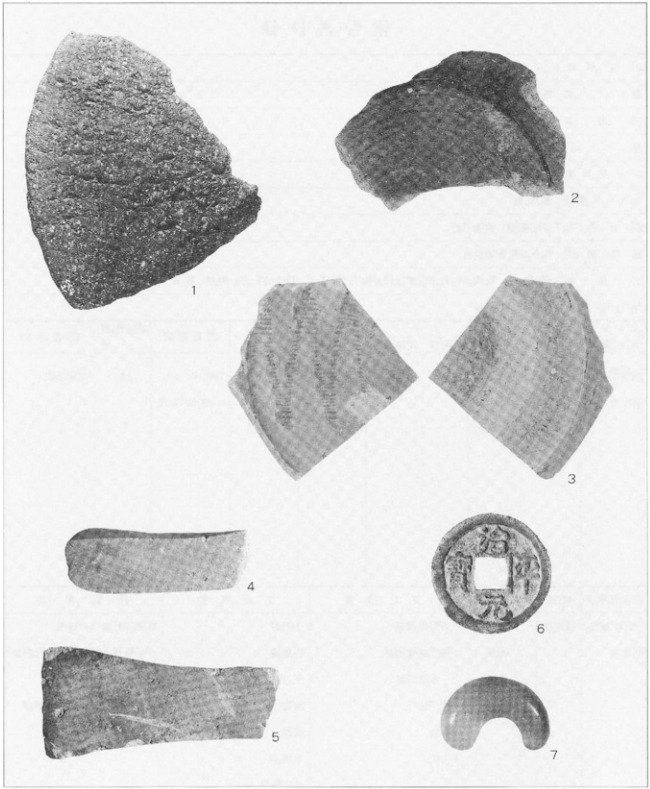


写真45　その他の出土遺物（2）　―Ⅲ・Ⅳ層出土―
1．　Ⅲ層　石臼
2～7．Ⅳ層　2．土師質土器小皿、3．磁器皿、4・5．砥石、6．銅銭、7．勾玉

報告書抄録

ふりがな	しろうまるたてあと
書名	四郎丸館跡
副書名	第2次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第218集
編著者名	平間亮輔・伊藤孝行
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980 71　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1　TEL022 214 8893～8894
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
四郎丸館跡 第2次	宮城県仙台市太白区 四郎丸字戸ノ内 87-1他	04100	01240	38°11′ 8″	140°55′15″	1996.04.10 ～1996.05.30	534	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四郎丸館跡 第2次	城館跡	古墳 平安 中世 近世	方形周溝墓 掘立柱建物跡 一本柱列跡 井戸跡 溝跡 土坑	土師器 須恵器 土師質土器 陶器 磁器 木製品 金属製品 石製品	底部穿孔複合口縁壺 「手焙形土器」のような形態と推定される土師器 中世の溝底面の畝状の障壁

仙台市文化財調査報告書第218集

四郎丸館跡

――第2次発掘調査報告書――

平成9年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

TEL 214-8893～8894

印刷　株式会社共新精版印刷

仙台市宮城野区日の出町2-4-2

TEL 236-7181